

黄金

前由...



黄金

前由...



繪入幼年唱歌

緒言

近き頃都に鄙にあまねく行ゆる、童謡唱歌少からず。そが中に、社會のため、世俗の上に益あるもあるべけれど、多くの過激にわたる、野鄙に流るゝが如し。さるゝを幼き人たちの何の心もく傳誦して、學校のかへるさ、打つれだちてうたひかはしつゝ、我門べをすぎゆくを聞きし事、あまたたびありき。そもく、童謡唱歌の、人心を感化せしむる事も、深く、あるの精神を奮ひ起さしめ、あるの精神を鄙俗にせしむる事も、其力おとろくに堪へたり。されば此書の、幼年子女に

忠君愛國の思想をやしきはしめ、優美高尚の觀念を起さしめんとて、我舊作に人々の作をつとへ、撰び出づるあり。

この書に載せんとて、去年の春幼年雑誌の誌上にて唱歌を募集せしに、その募に應せられし人のいと多かりしに、いたくよろこぶ所あり。されど紙數に限ありて、みちがら載せん事難ければ、こたびもれたる人々の歌の、二篇にかゝらず撰び加ふべし。

第二篇わか竹の巻、第三篇やちくさの巻の、つぎ／＼世に出すべければ、歌に志ある人々、高雅清潔ある作を、我方に投寄せられよ。

唱歌の句數の長短の、これをかぎらず。四句の今様にても、又

の數十句、數百句をつらねたる長篇にても、

唱歌の題のこれを定めず。忠君愛國、其他人倫に關せるもの、軍歌の類、さては往古の人物四季雜の景物にても、あるは幼年の教訓とあり、あるは幼年の嗜好に適すべきものをよしとす。

明治二十六年三月一日

佐々木信綱識

繪入幼年唱歌

目次

第一篇 ちとせくら

新	年	紙鷲のぼし	とさき時	園生の梅	君が代
春	の	光	夏のはじめ	夏のあした	暑き盛
くれ	ゆく	秋	惠の露	初み雪	我皇國
日の	皇子	日本男兒	輕氣球	三年の月日	燒野の原
あ	よ	竹	花やぐら	みかど川	鷹の巢城
花	う	ばら	さはし柿	旅まくら	磯山づたひ
櫻	貝	みどり子	小鳥の歌	賤の男	桃太郎

日嗣の皇子	清少納言	千代の挿頭	大和にしき	治まれる代
をささ子	學の窓	四季今様	衛生	年のはじめ
芝生の莖	海邊の暮景	伏見の野路	小楠公	能褒野が原
内外の宮	戀しき故郷	野遊	端艇競漕	いつくしま
學の山路	故郷の弟妹	隅田川	幼き弟に	あらしま風
師の惠	雨ふる日	忍が岡	夏の旅路	母の惠
親の恩	うすけぶり	海原	父君	か正月
雪のあした	すて子	をだまき	つま	琴人撰友
父母の惠	みちのく	都の春	若草	初鶯
ささらぎ頃	螢狩	千歳の秋	矢矧川	鏡の浦
門田のいね	沖の島べ	都のつと	玉川	姉君

幼年唱歌集

佐々木信綱著

新年

三つ四つふたつ	咲そめし	軒端の梅	をちがめても
いまいくつ寐	バこん年と	指をり數	へまちくし
年のはじめ	になりけり	門てふか	どの松かざり
大路にい	でて見わたせば	御旗の曇	らぬかげさよく
宿てふ	やどの日の御はた	松のとき	はのいろふかし
み空は	るかに見あぐれば	鳴渡り	ゆくあしたづの

八千代の聲も長閑け
 きに
 枝をあらさずふくか
 せも
 玄づかに御代を祝ふ
 めり
 目に見るものも聞く
 物も
 あらたまりたる新玉の
 たのしき時ぞ打むれて
 遊ばんわざいとおほし



年のはじめぞひとせの
 楽しくあそべもろどもに
 庭につとひて遊ばん

羽子に手鞠に紙鳶のぼし
 家にこもりてあそばん
 かるたもをかし雙六も
 さのさりながら幼童よ
 休暇のひまの暫時にて
 まなびの庭のひらけんの
 はやはと近しよく遊び
 さてよく學べもろどもに
 やよやをさな子心せよ
 ふたゝび来るものならず
 まなびの道をすゝむべし



幼なきはとんどく過て
 進むよはひに競ひつゝ

やよやをさな子忘るなよ
わが大君の御めぐみぞ
わするなよゆめ御恵を

樂しき年をむかふるも
また父母の御恵ぞ

紙鳶のぼし

紙鳶のぼす兒よいかにく
年のはじめのこの朝け
紙鳶のぼす兒よいかにく
風のどかなるこの朝け
其よろこびの聲ならし
此處にかしこに聞ゆなり
こゝにかしこに打むれて

いかに嬉しき紙鳶のぼし
いかに樂しき紙鳶のぼし
うなりの音のいさましく
紙鳶のぼす兒よ見よ見よ

互にのぼすその紙鳶を
かたみにのぼす其紙鳶も
いかでか高くのぼるべき
風の力のありとても
いかでか高くのぼるべき
つくす心のありとても
よしや一度のぼるとも
風の力のある上に
はじめて高く昇るめり
高く昇りし様を見よ
多くの人を下に見て

風のちからのなき時
つくす心のなき時
たゆめばやがて降るべし
たゆまず心を盡しつゝ
多くの人に仰がれて

其勇ましき様を見れば
 人と生れてかの紙鳶に
 いかで劣らんいかでか
 學のわざをつとめつゝ
 多くの人にあふがれよ
 多くの人を下に「見よ」
 學の業の力の紙鳶を
 風の方に異あらず
 學の業をいそしみて
 はじめて高く昇るべし
 此ことわりを幼年よ



高き境にのぼすなる
 たゆまず心を盡しつゝ
 さとりや得つるいかに

紙鳶のぼす兒よ如何く

をさなき時

見よく子供聞け子供
 なくうぐひすの初聲を
 花てふ花のおほけれど
 殊によしとぞ人のいふ
 鳥てふ鳥のおほけれど
 殊によしとぞ人のいふ
 人てふ人のおほけれど
 人はいはれよやよ子供
 人と生れて花とりに

軒端の梅にやどえめて
 雪を玄のぎて咲く花を
 谷よりいで啼く鳥を
 なかにも殊によき人と
 劣るをうしと思ひあば

をさなき時によく學べ

園生の梅

ふりつむ雪の深けれど
埋もれぬ香のなつかしく

まがはぬ色のいちじろく
園生の梅のさきにけり

あはれ婦女子こゝろせよ
堪へ凌ぎ来てかくばかり

ふく木枯をおく霜を
咲きいでにけりこの花も

文を好むと名におへる
こゝろを留めて思ひみよ

こずゑの花をかがめても
清きみさをに高き香に

なす事もなく世の中を
花のすがたの有りとても

仇にな過しそよしや身に
千々の黄金のありとても

容姿のうつろふ時あらん
うつせみの世の花の上の

こがねの盡くる時あらん
胡蝶の夢に似たりけり

うつろひ盡くる時もあく
残らんもの思へたゞ

うもれず朽ちず後の世に
清きみさをと高き名ぞ

清きみさをのよき人を
身をつゝしみてさて後の

かいみとまつゝ朝夕に
まなびの業をつとむべし

まなびのわざい多かれど
婦女の最も領め得たる

婦女に最もふさはしき
文のはやしをまづ分けよ

ふみの林をふみわけて
空ゆく月とあふがるゝ

龜の鑑とたゝへられ
書のかすゞ數へ見ん

うへあき色のむらさきも
打つゝきつゝをかしきに

うす花ぞめの狭衣も
枕かげるふたぐひなし

夜半の寐覺のなつかしく
世をかこちたる更科も

三津のはま松ものふりて
さる方にまたあはれなり

すこしくだりて鎌倉の
庭のをしへのこまやかに

比企が谷べにまゐるしけん
てらすいさよひ影清し

又近き世にいたりて
月のゆくへのさやけきに

三の鏡をうつしたる
池の藻くづもいひまらず

杉の下枝のいろふかく
雲井にたかく薫りけん

倭文の文布うるはしく
かつらの花ど香ぐはしき

あはれ婦女子こゝろせよ
文のはやしのかくのごと

わが日の本に生まげる
婦女の功業いとあほし

やよや婦女子こゝろせよ
いそしみ學ぶ事あくて

いかなる人もはじめより
つくりし書いあらざるぞ

いそしみまなべ婦女子よ
心とあしてつとめなば

いかなる業もこの花を
成らざる事のあるべきぞ

文を好むと名に負ひて
堪へ玄のき来てさく梅を

ふく木枯もかく霜も
こゝろといせよ婦女子よ

君が代

やなぎの眉もひらけそめ

花のおもわもほゝゑみて

樂しき春日になりぬれば
もよろこびの聲すなり
思ふことなく日をおくり
治まれる世の御みぐみぞ
うたへようたへ君が代を

野べに山べにうぐひすの
まなびの道をわけゆくも
いざゞ子ども諸どもに

春の光

野にも山にもかすみたち
春のひかりいづこにも
樂しきころをいざ子ども
學ぶをりにいよくまなび

花もいつしかさきそめて
到らぬ隈こそあかりけれ
あそびにいだよ思ふそち
遊ぶをりにいよくあそべ

夏のはじめ

長き日わかず眺めてし

花にうかれて過してし

空しき庭となりはて、

若葉のこずゑまげ

りそふ

夏のはじめに成

にけり

山ほとゝぎす來鳴

きあん

夏のはじめに成

にけり



花のいつしか散はてぬ

春のいつしか暮はてぬ

胡蝶の夢と覺はて、

花橋もかをるべき

夏のはじめになりけり

夏のはじめになりけり

たのしき春の夢の間に

わびしき夏の目の前に

やよや幼童思へかし

過ぎゆくものとさどれかし

來れるものと思へかし

まだ兩親の手に有て

すきはち春とさどれかし

いそしみ勤むる其程の

いそしみ勤むる夏の來ぬ

憂世を知らぬ其程の

學の庭にかりたちて

すきはち夏とさどれかし

然のあれども今よりの

いそしむ兒等の慰めに
山ほどゝぎす音づれて

木々の梢の瑞枝さし
花橋もかをるべし

瑞枝さし添ふ木々を見よ
其いろくの濃き薄き
千尋の陰とまげりなん

まだうら若き梢だに
差別のあれどとりくに
すがたの既にいちじるし

山時鳥鳴くを聞け
多くの人に待せつゝ
おのが五月に成ぬれば

その初聲をいつしかと
多くの人に待たれつゝ
大空高くあなるあり

花橋のさまを見よ
見はやす人のあらねども
結ぶ其實の世の中に

花の姿のなつかしと
薫のいとも高くして
愛ぬ人こそあかりけれ

やよや幼童心して
君の爲はた家の爲
雲井に高く名のりつゝ

いそしむ學べ國の爲
千尋の陰と生繁り
後の世かけて薫れかし

夏のあした

まげる若葉のひまもりて
ひるの暑さの堪へがたみ

そよぐ朝風こゝちよし
文よむわざもなし難し

あしたのほごによく學べ
をさなき時人の身の
人となりての事多み
をさなき時によく學べ

暑き盛

てる日の光たへがたく
いで湯あみに箱根山
瀧つせ見にと二荒山
うしほ浴にとこよろぎの
鶉かひ見にとて長柄川
都のほかにあつけさを

あしたのほごぞやよ子供
文よむわざもなしがたし

あつき盛になりけり
七湯めぐるもいとをかし
坂路のぼるもいとをかし
磯べつたふもいとをかし
小舟くだすもいとをかし
玄のがん所いとおほし

とくおき出て玄のばすの
ひらくを見るも又をかし
朝顔見るも又をかし
玄ぐる、蟬の聲さゝて
都のうちにあつけさを
風こゝちよき朝まだき
文よみをるもいとをかし
まなびの窓に友をちと
わが宿にてもあつけさを
おのがまに、都にて
すぐさん子らも諸どもに

池の汀の花はちす
さてかへるさに入谷ある
日ぐらし上野あすか山
月まちをるも又をかし
玄のがん所いとおほし
庭の若葉のかけ玄めて
月かけ清き夕まぐれ
語らひをるもいとをかし
玄のがん時ありぬべし
過さん子らも田舎にて
暑き盛の程もなし

あしたゆふべに心して

野べの錦

萩にすゝきに女郎花
おのがさまく色に香に
野べのにしきを見るとき
まぢびの庭におりたちて
文よむわざをおこたらで
たれかあはれとめでざらん

くまゆく秋

雲か雪かどちがめつゝ
めでし昨日と思ひしに

事なくおくれ此ほをを

千くさ八千種かぎりさく
きそひがほにも咲みちし
誰かあわれとめでざらん
をしへ艸つむをさな子よ
花さく秋にいたりなバ
いそしみ學べいざやうぞ

さきの盛のさくら花

扇をはちつひまもちく

わびし昨日と思ひしに
今年なかくの半もくれ竹の
つげし昨日と思ひしに

櫻の木この葉はちりはてゝ

あしたゆふべの風寒く
くれゆく秋の庭のおもを
年としのをはるもほと近し
げに歳月としつきの人ひとをまたず
あだにち過しすくそ今日けふの日ひを

惠の露

(天長節祝頌)

あつしくとあつけさを

葉分の風の秋きぬと

涼みし陰の紅葉そめ

千草八千種うつろひぬ
見るにつけてもかくて又

學の庭のをさな子よ

をさまれる世の時つ風
浪まづかある北の海
まげりそひゆく民草の
いはへやいはへ諸共に

枝もならさず長閑にて
沖なは島のはてまでも
靡かぬ方こそなかりけれ
千代田寶田千代かけて

常磐かきはに榮えゆく
わが大君のあれまし、
あまつ日の旗軒ごとに
いはへやいはへ諸共に

大和島根をまきませる
今日の吉日と曇りなき
かゝげぬ宿こそなかりけれ
千代田寶田千代かけて

今日を祝ひてさき出し

くもるの庭の菊のはな

おほみ恵のつゆふかみ
清きその香もその色も
うたへやうたへ諸共に

枝にも葉にも濕ほひて
どの國々にたぐひなし
わが大君のよろづ代を

教へ草つむをさな子よ
わがおほきみの降誕の
吉日の今日ぞもろ共に
わが大きみの萬歳を

學の道をすゝめます
吉日の今日ぞやよやよ
謠へや謠へいざやいざ
わがおほきみの萬歳を

初み雪

つもれよ積れ初み雪

ふれくみ雪いとしく

積らばつくらん雪の山

降らば遊ばん雪軍

ふれくいと豊年の積れよつもれつとへつゝ

玄るしと聞し初み雪書をよみけん雪よ雪

我皇國

天つ日つぎは神代より國てふくに多けれど暑さ寒さもよそに似ず國てふくに多けれどかくよき國に生いでゝ

かはる時なく榮えつゝ殊にすぐれてよき國ぞ海やま川もけしきよく殊にすぐれてよき國ぞかくよき國に住なれば

いそしみ學べ國のため

いそしみ學べいざ子供

我大君

天つ日嗣なくもりなくことに榮ゆる大御代を國てふ國に玄きわたすわが大君をたふとしと

み光四方にかゝりやきて仰げや仰げいざ子どもまがねの道の一すぢに仰げや仰げいざ子ども

日の皇子

千代とことばに長閑なるくもる時あく天の玄た曇るときなき日の皇子ぞあふげやあふげ諸共に

春の宮居を玄めまして照したまはん日の皇子ぞ學の庭のをさあ子よ玄たへや玄たへもろ共に

幼年唱歌集
二十六
博文館蔵版

日本男兒

千ひろの海も埋むべし
日本男兒のふるひたち
たゆまずあかず朝夕に
石にも松のおひぬべし
日本男兒のきそひたち
たゆまずあかず朝夕に

千引の岩もくだくべし
あす事何か成らざらん
いそしみ學べやよ子供
巖にも矢のたちぬべし
なす業何か成らざらん
いそしみ學べやよ子供

輕氣球

人のたくみを梶として
天の川原にゆく舟の
ふりさけ見れば見るか内に

雲の波わけはるくと
心も空にのぼるらし
大空高く成にけり

月の都もかく去つ、
ゆきかひ安く成ぬべし

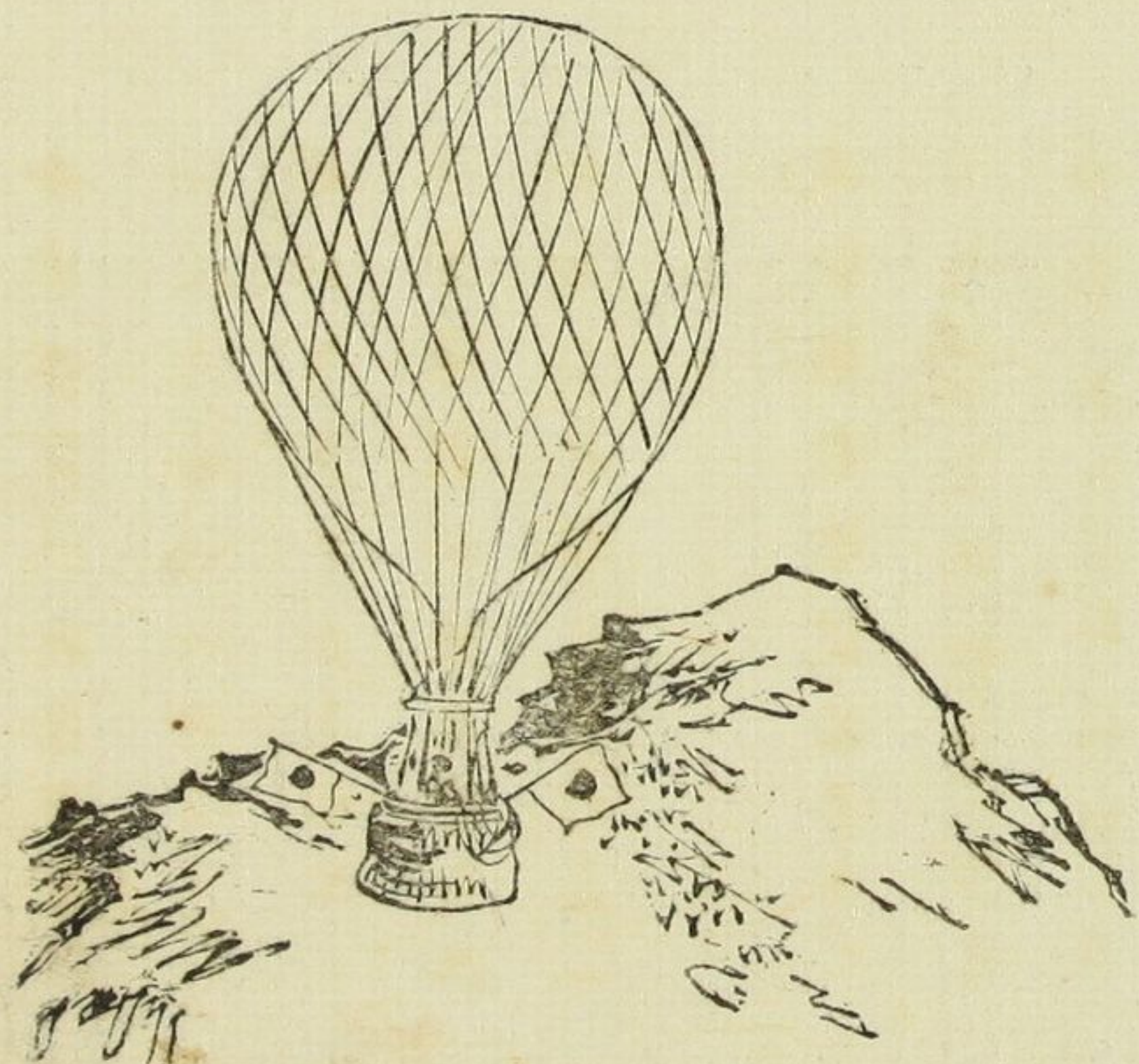
三年の月日(某學校を卒業せし人に)

三年の月日たゆみなく
つとへあつめし雪螢
其いさをしのいちじろく
世にあらんれん時なきぬ
赤き心も清き名も
世にかいやかん時なきぬ
いそしめわがせ今よりい

燒野の原

(明治廿五年三月
神田大火の時)

まことの道をふみわけて



宵のほそより吹まきる
心しつゝも臥したるに
すりあらず鐘の音強く

嵐の風のはげしきに
臥たりと思ふ程もなく
火事よくの聲近し

窓をあくれれば紅の
遠くもあらぬ家々の
ある神よりも恐ろしく

焔の天をこがしつゝ
焼くる響のすさまじさ
赤き月影かげ高し

風の勢つよければ
立つとききたる家藏も
風のまにくはらくと

右に左にひろがりて
見るくはかなく焼落て
ちりくる火焰おびたし

風上なればと頼みしも
今の我家も危ふしと
小路一つを隔てたる

火の漸々に近づきて
思ふ間もなく廣からぬ
前なる家まで焼失せぬ

家の惜とも思ひねと
つとへ給ひし千萬の
助けてたべと祈る間に

惜さ父の年を経て
書の巻々いかでく
火の手弱りて夜の明ぬ

神の恵に嬉しくも
火の猶南に移りつゝ
多くの人の盡力に

我家の事なく遁しも
今川橋をも越しかど
晝過ぐる頃消はてぬ

幼学集 三十一 博文館蔵版

思へばあはれあはれ此
昨日榮えし町々も
見渡すかぎり限なき

夜半の嵐の風先に
うるはしかりし高樓も
焼野の原となりけり

家も資財も失ひし
子を失ひてもとめえぬ
親に離れて迷ふ子の

佗しき人やいかならん
親の心やいかならん
心の程やいかならん

焼けし家ゐり四千餘戸
失にし人も多しとぞ
焼野の原をながむれば

烟の中につゝまれて
おもへばあはれ哀今
くだけし瓦うづ高し

なよ竹 (日野阿新丸事蹟の一節)

にくしと思ふ父の敵
罪もいまさぬ我父を
にくさもにくき父の敵

今ぞうちつる嬉しくも
及の露となしはてし
今ぞうちつる嬉しくも

あな喜ばしあな嬉し
敵いどりぬ父君を
討ぞおほせし討得てき

あき父君もきこしめせ
失ひまつりし敵い今
なき父君よきこしめせ

父に逢べき爲なれば
わびしき事を重ねつゝ

厭ひいせねと様々の
遙けき海山越こしに

功年昌歌集
三十二
博文館蔵版

罪人なればと情なや

逢みん事を許されず

父のまします處ぞと

聞得し方をあがむれば

松杉深くおひえげり

高き土塀を二重三重

打めぐらし、其奥の

牢屋の中にいますとよ

一目だにもと思へども

請へど頼めどかひなくて

歎きの内にはかなくも

なり給ひぬと人づてに

さしにし時の悲しさ

やよや父君なき父よ

あれく聞ば聲すなり

我を求むる聲すなり

臥處に忍び入し時

いねたる者を斬ん

枕蹴上げて打おこし

驚き起るを一太刀に

其折さけびしかれの聲

聞つけてくる人々よ

見附られじと我のかく

竹の林に隠れしを

驚き騒ぎていかばかり

我行方をか求むらん



何處いづこを見ても我影わがかげの
松明まつのみあかくともしつれ
遂つひにこ此處こゝもあざらんと

見えぬにいと人々ひとの
此處こゝに彼處かしこに求もとむらん
求もとくる人のなくてや

多勢たせいの彼方かなたに向むかひなば
父ちちのかたさの討うち逐とげて
敵あだのとめぬ其そのさきに

通のがれん方かたなき我命わがいのち
望のぞみたりぬ今いまの唯ただ
人手ひとてにかゝらぬ其先そのさきに

同おなじ處ところにあらねども
佐渡さどの小島こじまに我命わがいのち
心こころにかゝるいたたい獨ひとり

なき父上ちちのうへと諸共もろともに
捨すてんの惜をしとも思おもひねど
都みやこにいます母ははの上うへ

玄こひて請こひつゝ遙々はるくと
我上わがうへいかにと朝あさな夕ゆふな
慕したひますらん我上わがうへを

出いで立たちきにし其後そののちの
此方こなたの空そらを眺ながめつゝ
思おもひますらん我事わがことを

もしさはりなく望のぞむとげ
幾度いくたびとちく門かどにいでゝ
嬉うれしき便たよりのあらんかと

歸かへりこん日のあらんかと
待まちかますらんいかばかり
待まちかますらんいかばかり

哀我あはれわれながらいかでかく
かひなき歎なげきに沈しづみけん
めゝしかりけり我われながら

はかあき思おもひに沈しづみけん
戀こひしからぬにあらねども
心こころさだめていざさらば

やよ待てまばしかく計
此處に心のつかざるの
守りますらん我上を

時移るまで皆人の
あき父君の大御魂
天の御神も我上を

宵の雨風晴れゆきて
この御守をよそにして
命死なんと思ひし

遁れ出でんに便よし
此御助をよそにして
淺しかりきをこなりき

國の爲はた家の爲
世にあるかひの有るを
何のかひかあるべきぞ

君に心をつくしてぞ
こゝに空しく成ぬとも
國の爲はた家の爲

生長らへてなき父の
朝廷につかへまつるはぬ
なき父君の手向に

その志うけつぎて
臣のやつこら亡さば
是にまさらん孝あらじ

こゝにて失ぬと思ひつゝ
なき物にして仕へなば
わが大君につくしなば

今より後の我命
たい一すぢに眞心を
扱こそ忠義といふべけれ

いで此處をし遁れ出
然のあれども何處より
行かば忽見出され

忠孝ともに全くせん
遁れ出べき門さして
捕へられんいいでしも

うしろのいとも深くして
渡りゆかかんを浅からば
外には出ん方ぞなき

底ひ知られぬ堀ぞかし
飛越てんを狭からば
如何かせまし如何にせん

やよ天つ神父みこと
あはれび給へ阿新を
のがれ出べきよき道を

救はせ給へ阿新を
敵に知られずひそやかに
いかで教へてよき道を

思ひつきたりよき事を
生繁りたるちよ竹の
我を助けん爲にとて

見出たりけりよき事を
彼方の岸に靡けるの
靡さや爲らん我爲に

天つ御神の我父の
わが爲にしも此橋を
渡しましけんよき道を
我に教へん爲にとて
我身の軽しさらくと
いれや昇りていれやいれ
夢か現かあな嬉し
此方の岸に事もなく
事なくつきぬ嬉しくも
守らせ給へわが上を



天つ御神よ父君よ
夜のまだ深し溱べに

花やぐら 其一

夏箕の川の川戸より

高峯につづく白旗の

麓をまもる兵士の

寄せくる敵を防ぐなる

築きし城のはるくと

頃延元三年の春

まだ雪深きみ吉野の

こもりぬませる大塔の

押寄せきたる賊兵の

山路遙に見あぐれば

み山おろしに打靡さ

かぶどの星のきらめきて

其有様の雄々しさに

雲井に高くそびえたり

二月半の事なりき

吉野の山の奥深く

宮を攻めんと畏くも

北條方にさる者と

きこえし出羽の入道が

ひきあつれたる數萬騎

はや矢合の始まりて

麓ま近く寄すれども

城のあたり殊更に

道細くして谷深く

然のみならず忠勇の

心に富みて山道の

案内くはしき官軍に

いかでかいかで勝るべき

七日のほどの合戦に

討れし者の數知らず

多勢を頼みし賊軍も

この有様にかぢ恐れ

暫したゆたひるし程に

城の案内にやどひてし

岩菊丸のうちいで

かく徒に日を経るの

最も甲斐あき事ぞかし
攻れば人のみ討れつゝ

つくづく見るに大手より
いかでか落る時あらん

思ふに城のうしろなる
頼みて守る武者あらじ

金峯山に嶮しきを
物にあられたる足輕を

夜のまぎれに忍ばせて
関の聲をばあげよかし

はがらくと明ん頃
聲に驚く頃にしも

かくと聞つゝ賊軍の
殊にすぐれし兵卒を

いたく喜びさらばとて
金峯山へと赴けぬ

こいしき岩根傳ひつゝ
嶮しき方とたのみけん
旗のみ風にひらめきて

谷を廻りて行たれば
梢に高くゆひつけし
防がん人もなかりけり

其二

足利方の伏勢の
繁る木の下岩陰に
夜の明ゆくをまつ程に
相圖の時に成たれば
左右より押寄せて

思ひのまゝに忍び入り
弓矢を伏てほのくと
はや東のまらみそめ
大手のつはもの五万余騎
たい一もみと攻上る

勢づきし足利の

賊の有様見おろして

容易ならずとみ吉野の
命も惜まず攻口を
かゝる折しも搦手に
此處に彼處に火をかけて

さしもに猛き大衆も
殊に火勢の強ければ
共に死するもある又
死するも有ておのがし
深き大手の堀一重

吉野の大衆五百人
守りて敵を追下す
廻りし賊兵數百人
関の聲をぞ揚にける

前後の敵をふせぎかね
敵に引組さしちがへ
猛火の中に走せ入て
思ひくの討死に
空しき骸に埋もれぬ

勝に乗じて賊兵の
猶も進みて大塔の
藏王堂へと打かゝる
討出給ふ御ありさま
赤地の錦の直垂に

勝手の杜を跡にちし
宮の籠りておはします
宮も今へと思しめし
のぼる朝日にかゝりて
鎧の緋威さらしくし

忠勇共にならびあ
宮の左右に従ひて
敵の真中に打入て
寄手の數ハ多ければ
及にいかでむかふべき

すぐれし兵士二十人
雲霞の如く進みくる
彼方は方と斬りたつる
眞心こめし人々の
四方の谷間にさつと引く

其間に宮のいちばやく
 今の防げを詮もなし
 いでや最後の酒宴せん
 立せ給へる御姿を
 頬のあたりも傷つきて

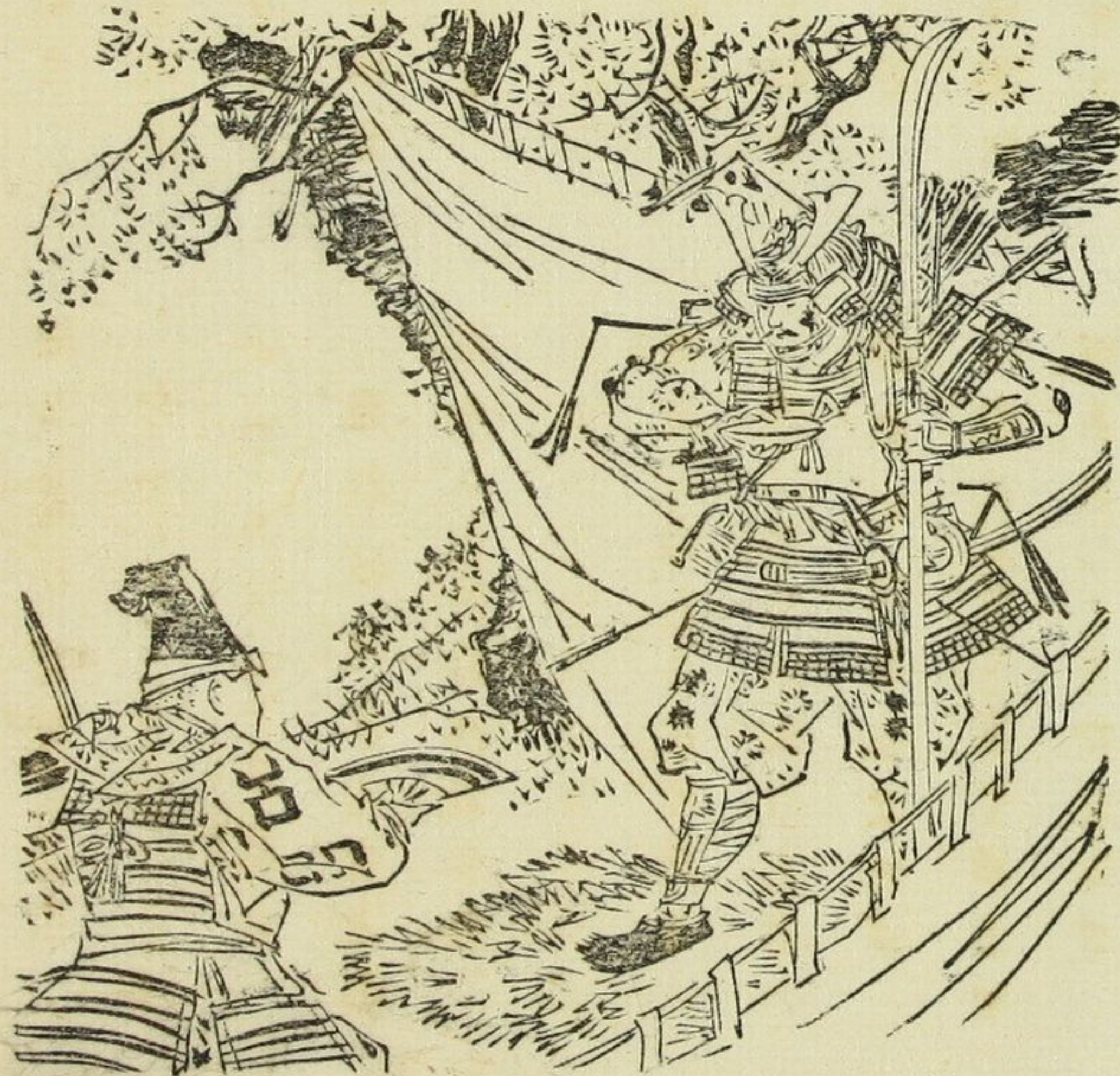
其三

雄心たけき宮あれば
 更に物とも思されず
 大盃を三度まで
 木寺の相摸大太刀に
 宮の御前にかしこまり

藏王堂へと歸りまし
 年頃よくも仕へしよ
 いざ人々と大庭に
 見れば立たる矢七筋
 流るゝ血汐おびたし

流るゝ血をも傷手をも
 常に替らぬ御けしきに
 打傾けてましませば
 敵の首を刺し貫きて
 聲勇ましくうたひいづ

「戈鋌劔戟を降す事
 電光の如くなり
 磐石岩を飛ばす事
 春の雨に相同じ
 然りといへども
 天帝の身に近づ
 かで
 修羅彼が爲に破
 らる」と
 はやしを擧て謠
 ひつゝ



刃を左右に打ふりて

舞たる様こそ雄々しけれ

大手の戦其はどに

いよくはげしく成増り

入交りたるどきの聲

聞ゆる折しも入來る

村上義光口惜げに

一二の城戸の敵の爲

討破られて今のはや

防がんやうもあく成ぬ

何處にもわれ切取り

宮に早く落給へ

われ御跡に留まりて

申すも畏き事なれど

めさせ給へる御鎧

錦の直垂給はりて

御名を冒し御命に

替りまつらんいざくと

申せば宮のいかでく

忠義にあつき心ざし

喜ばしとい思へども

我も打つれ世をさらん

聲あらゝげて義光の

いひがひもあき御詞

大事の御身と思さずや

早とくくと上帯を

とき奉るに宮も又

實にと思して義光よ

汝の恩の忘れじと

涙ながらにのたまひて

勝手の杜の御前より

事なく南に落給ふ

義光鎧をぬぎかへて

二の大城戸にかけのぼり

宮の御姿幽にも

成ゆくさまを見定めて

早時よしと高やかに
打名のりつゝ大塔の

宮の最後を見よや

とて

清きをはりを透

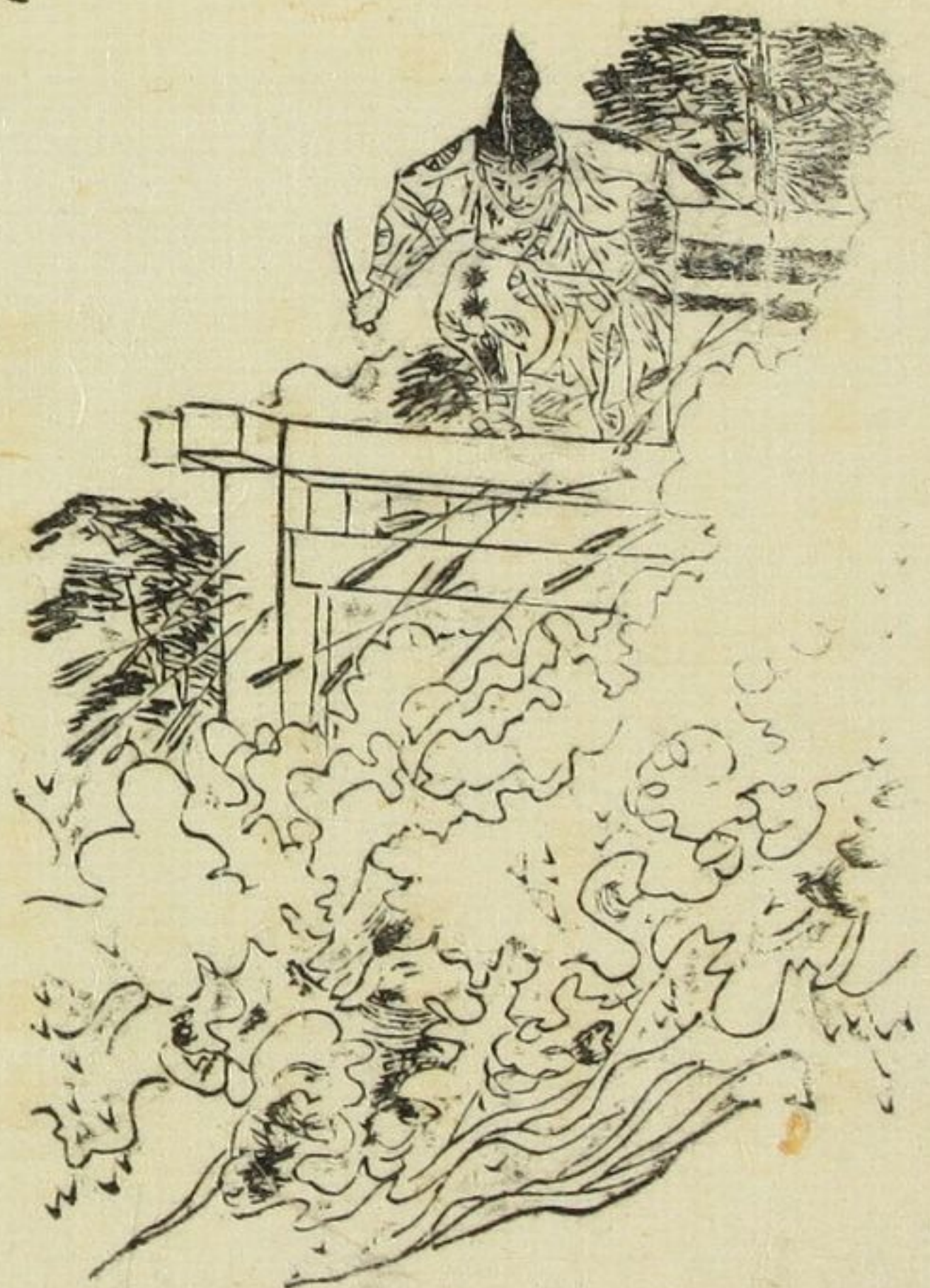
果ぬ

あはれ千とせの春かけて
其名かぐはし花やぐら

みなと川

さこえあげつる言の葉を
ゆく瀬の波のうたかたど

せきとめられてはかなくも
消ましぬれど清き名の



八千年かけて千代かけて

鷹の巢城 其一

遙に流るゝ九頭龍川

水のながれも鐘の音も

昔の人のかげもなく

流れもゆくかみちと川

彼方にそびゆる平泉寺

昔のまゝにきこゆれど

昔の春のいまいづら

枯れ残りたる旗薄

松のうれふく夕嵐

見あぐる空に今も猶

まねくとすれど力なく

唯矢さけびの聲に似て

弓はり月の影すこし

おもへばいとほし思慮なく

西も東もわきまへぬ

いくその
民が戦争

の
其人數と

うながさ

れ

空しき骸を

埋めけん

この谷あひにかの岡に

あはれ昔をまのふれば



南と北にわかれしも

北山風のはげしきに

花の盛に匂へども

水泡と消し湊川

安倍野黒丸杣山と

月日にそへて勢力の

それが中にも雄々しき

加賀をわはせて五箇國に

跡なく成しその時に

のがれましつる吉野山

榮えん折のいつの世か

それだにあるを金が崎

打つゝきての敗軍に

衰へ行きしをいかにせん

越前越中能登若狭

南朝方の城のみな

残りし城よたゞ一つ

其名も高さ鷹の巢の
勇力智謀たぐひなく
畑の時能將軍に

孤城を守りし人の誰そ
士卒をあはれび慈くしむ
從兵わづか四十人

足利方におどろきて
向はん事につらけれど
いざく攻よど打あわて

鬼と呼ばれしかの武者に
打すておかば天下の大事
騒ぎたちしあな笑止

頃興國二年の春
北陸道をかきあつめ
打ひきゐたる兵卒の

残の雪のふかけれど
高の師春將として
其數すべて七千騎

城の周圍を千重百重
つかれし所をせめんとて
夜を日につぎて築さし

打かこみたる其うへに
一つの城のそのために
三十七の向ひ城

其二

畑の時能將軍の
をさなき時より力筋
弓馬水練とりぐに

武藏の國に生たちて
太くするどくたくましく
坂東一の名ぞたかき

玄かのみならず謀略
忠義のこゝろあつくして
數度の軍に一度も

人にすぐれていちばやく
情もふかき性質なれば
負たる事こそなかりけれ

それに去たがふ兵卒も
義心にとめるその中に
鼎もあぐれ山も抜く

みなたぐひなき剛の者
鬼八郎に大夫房
大力無双の二人まで

また犬獅子と名
に負て

敵の陣處に忍入り
彼方に用心あ
る時
一吠はえて走
りいで



用心なれば尾を振りて

主をむかふる犬もあり

闇の夜毎に犬獅子を
打つれだちて或時
又ある時七つ物

案内者となしつ三人が
帽子かぶとに鎖を着
背にさしたる大よろひ

姿を敵に去らせじと
足ゝろらかに進みたち
驚き騒ぐばかりにて

昨日の大將今日の足輕
縦横無盡に斬り入れば
刃をまじふる敵もなし

逆茂木四方にめぐらして

ぬりたる堀のいと高く

厳めしげなる城なれど
唯時の間の討入に

守れる士卒の心から
見るく城の落はてぬ

此處も彼處もかくのごと
陣屋のあたりに捨おきし
頼める主に残されて

攻落されて人もあき
弓矢物具うづ高く
いなく駒の聲あはれ

中にも殊にをかしまし
おのが城をば保ちつゝ
忍びづくにおくりくる

我身の耻辱を顧みず
味方の笑をのがれんと
兵糧またの酒さかな

この敵ながらいさましや
そへたる文を讀見れば
夜討にするを許してと

勞をねぎろふこゝろかと
我らの城のいかでく
くりかへしての頼み文

其三

然のあれども寄手にも
はかなく落るを口惜しと
ひきゐつれつゝ二百人

味方の城のかくばかり
上木の家光一族を
物具かためて攻のぼる

自余の寄手も是を見て
知りたる彼の攻入の
上木一人の手柄にあすな

城の案内をかねてより
落す手だての有あらん
我らも跡よりいざやいざ

味方の進むにはげまされ
木の根にすがり岩根を傳ひ
十八町の坂路を

手にとる物もどりあへず
さしも嶮しく聳えたる
唯一息にえいくと

城の中に音もなく
静まりかへりて有しかば
さしもの將軍かなはじと

敵の有様見んものと
この喜ばし喜ばし
逃げうせたるぞ逃たるぞ

おのが心に引くらべ
呼はりかはし勇みたち
耳もつらぬく大聲に

逃げ失せたりと口々に
鹿垣間近くなりし時
畑の將軍こゝにあり

畑の將軍こゝにあり
押のけつゝも六騎の武者
太刀長刀の鋒先を

いざく來れと逆茂木を
きたえし鐵の物具に
揃へて出たる恐ろしさ

人なき事と油断して
前驅の寄手の山風に
列を亂してはらくと

そいろに進み近づきし
木々の木葉の散るがごと
麓路さしつゝ崩れゆく

敵の小勢を知らざるか
寄手も中にありたれど
又將軍の大聲と

踏留まれど勇氣ある
逃足つきし士卒に
首をちゝめて我がちに

かゝる折しも太夫房
まろがし落す大磐石
あるの鎧をひしがれて

大木小脇に手ばさみて
數多の士卒に見るが内に
あるの兜を碎かれて

それより後のいとしく
わが城々を守りつゝ
恐れおのゝく姿にて

攻のぼりくる者もなく
小鳥の群の鷹の巢を
たゞいたづらに數千騎

其四

世は春ならぬこの頃も
尾上の櫻ちりはてゝ
聲する夏になりぬれど

春を知らせて咲出し
歸るに如すと啼く鳥の
きは攻寄る者もなし

近く寄せあは謀畧
眠りざましにせん物と
川を境に向陣

思ひめぐらし長き日の
待構ふれどいかにせん
遠く取まく女々しさよ

暑しどわびし水無月も
膚寒けく吹くまゝに
露をよすがに影やどす

ほどあく過て秋風の
かたしく鎧の袖枕
月の光もあはれにて

霧の籬にくつつわ虫
駒の蹄のおどいせで
降み降らずみ定めなき

聲のすれども打よする
木の葉まじりの村時雨
神無月にもなりにけり

畑將軍のつくぐと
此まゝにて何時迄も
かく數箇月の籠城に

敵の有様ちがめつゝ
戦ふ時のなかるべし
兵糧も空しく成そめぬ

あはれ一度目ざましき
士卒の英氣おこし立て
我散さるゝかいでやいで

戦なしして月頃の
敵を散すか若く又
武運をこゝに定めてん

思ひ定めて城の内に
われ宗徒のつは者の
城の東につゝきたる

十一人を残しおき
十六人を引具して
伊地知山にぞ昇りける

頃の十月廿一日
中黒の旗二ながれ
駒の手綱をひかへつゝ

まだ霧ふかき東雲に
山松が枝に打ちたてゝ
寄手おそしと待居たり

寄手の大將是を見て
畑將軍に加勢して
二十二日の卯の刻に

平泉寺なる衆徒ばら
寄るとればしいざ討てど
促がしたてし三千騎

初めのはどの誰もみな
左右をく進まで有しかど
少しも懼れず我さきと

敵の多少をはかりかね
小勢と知りて勇み立
山の麓におし寄せぬ

其五

敵の近づく頃しもわれ

着たる鎧の緋緘の

さらめく太刀を翳したる

駒乗り出す畑將軍

登る朝日にかゝりやきて

その有様のいさましさ

劣らぬ勇士十六騎

多勢の中にかけ入りて

攻め立てられて忽に

前後左右に打并び

追ひかけまはし駈乱し

士卒の遠く逃れゆく

敵の大將之を見て

たどへ鬼神にありとて

懼るゝ事の有べきや

見よく僅に十六騎

魚鱗に備へ取り込めて

下知の詞のす

るどきに

士卒も心ふり

おこし

三千余騎のた

い中に

取かこみたる

十六騎

さしもの將軍

今のはや

危ふげにこそ

見えにけれ

一人も餘さす討留よ



まかひあれども將軍の
名にしおひたる鹽津黒
鎖の鎧かけたれば

乗りたる馬の逸物と
五尺三寸ありけるに
射ども突ども如何でか

鎧の鼻にかけおとし
誠に鬼神のあらはれし
従ふ人々またどもに

蹄の塵となぎたて、
姿もかくやと見るまでに
當るにまかせ斬り倒す

心女々しき士卒ばら
忠義にあつき武士の
三千余騎のちりぐに

よしや千萬ありとて
一人にいかで向ふべき
川の向ひに退きぬ

軍終りて將軍の
其つはものを集めしに
六騎の夕の露と消え

帷幕の中に歸りつゝ
あはれ口惜し口をしや
八騎の痛手負ひたりき

まかのみならず將軍も
肩にあたりし矢一筋
かれ足利の逆臣と

手傷の物ども覺えねど
さらに鏃のぬけざれば
叫びいひつゝまた終に

星霜うつりて五百年
武名ますく高くして
雨風烈しく吹く夜半の

昔の夢となりぬれど
いま猶残る伊地知山
矢叫びの聲さこゆとぞ

駒とめ石

卯花くたし五月雨の

いかにか爲けん四月より

雨さへ更に降らざれば

秋のみのりの年毎の

賤の歎のつもりつゝ

降ついくべき頃なるを

八月に成れど聊の

山田の稲の玄をればて

十が一つに満ずして

九月にさへ成にけり

斯ていいかで世を經んど

雨請祈る聲満て

そゝぎ出たる村雨に

聲また四方に満しかど

いづこの里も里毎に

祈りし甲斐か日を経つゝ

いんん方なき喜の

其喜の聲のしも

暫時の程に世中の

歎の聲と又なりぬ

今日かくと晴るゝ日を

はや一月にありしかバ

何處の家ゝ流れたり

聞たび毎に世の人の

かきくらしたる大空を

待てども待と晴やらで

四方の川々水まして

何處の橋の落ちたりと

安き心も更にあく

唯恨めしと守るめり

水泡さかまく角田川

遂に堤のきれしより

浮き漂はん有様に

今戸石濱海をして

家ゐる人も時の間に

いかいのせんと騒ぎたち

つかさくの人の人々
救ふとすれど救ひ得ず

數多の小舟浮べつゝ
おぼるゝ人の數知らず

時の將軍家光の

大城のやぐらに此様を

遙にながめていざやいざ
力を合せ救はん

みづから行て人々に
駒を進めて淺草の

川べに到れば彼方にて
あるゝ家の棟橋の桁

見しに勝れる凄まじさ
矢よりも早く流れくる

「われ將軍によざされて

多くの人のおぼるゝを

いかで外にの見るべき

彼方の岸にとく行て

その有様を見てくべし
さばかり強き水勢に
我行べしといひ出る

疾行見よと下知あれど
かたみに顔を見合せて
者こそ更になかりけれ

「いひがひもなき者共よ

よし川水のはげしども

よし川浪の高しども

はげしき宇治の流だに

さき争ひし武者有き

遙けき志賀の湖水も

乗渡したる猛者有き

汝等行かすの我行かん

いひがひもなき者共」と

既に駒をば入れんとす

かたへの人々驚きて

駒の手綱をひかへつゝ

「この淺ましき御心よ

此水勢をみそなはせ

もしも乗入れ給ひなば
『いなく放せ世中の』

貴とさ御身も水の泡』
治まり行くに随ひて

ゆるびもてゆ

く武士の

眠れるまゝこ

覺させん』

『放せ』『放さじ』

『放すべし』

進み諫むる聲
のうちに



はるか彼方の水上に

漲る水を事とせず

駒打入る、武者一騎

か黒き立髪わかぬまで

かゝる白波鞭うちて

沈むと見れば又浮び

進む姿の勇ましさ

『彼の黒駒の誰なるぞ』

『乗たる武者の誰なるぞ』

詞のうちに又一騎



『わな勇まし』と將軍の

波に色そふ白駒を

うながし進めて前に立つ
扈從の人々打守り
白さの誰とも心得ず

武者に聲かけ進みゆく
『かの黒駒の阿部豊後
『さていかの武者忠秋か』

安部の豊後忠秋の

去年の秋より將軍の

勘氣を受し事ありて

日々の出仕を勤しめど
命捨てと思ひしも

み氣色猶も變らねば

平田彈衛に留められ

年経て仕ふる老臣の

捨んと思ひるたりけり

事ある時に清く身を

捨んと思ひるたりけり

今日も傍に侍らふに

駒のり入れよと將軍の

詞にこゝと思ひたち

彈衛を招きて今日こそ

底の水屑と身を爲さめ

今はの際に思ひねく

事とて更にあらざれど

心にかゝるの母君と

まだいわけなき幼子ぞ

汝に頼むといひ捨て

主の赴ふき給ふに

我のみいかでかくれんと

彈衛も直に打ついき

黒駒白駒打わたす

さしもにはげしき水勢も

この眞心に恙なく

むかひの岸に行つきて

かたへに立る大石に

駒をどめつゝたはずめば

高くいばゆる聲すぞし

『あはれいさまし事もなく
まかのあれども歸途の
あたら勇士を失ふな
とくく漕て』と將軍の
流るゝ水にさゝへられ

彼方の岸につきたるよ
人馬共に疲るべし
小舟をやりて助けよや
詞に小舟を進むれど
彼方此方に漂ひて

彼方の岸にのこかしこ
『さらば歸りて此様を
馬につかれてこの度の
もとより捨し命なり
二つの駒をうかがして

駒の上より見渡して
聞え上べしさりながら
いたらん事も難けれど
いざく行かん』と又共に
さかまく波間を遙々と

あれよくと人々の
まもる間もなく諸共に
將軍直に此方へと
日頃の御氣色かへりみず
御どがめならんと静々と

危ぶみつゝもいかにぞと
さはりもあらず着てけり
二人を召せば忠秋の
人より先に渡したる
御前に近くかしこまる

家光ゑみを含みつゝ
僅かの水を恐れてい
いかでかいかで言るべき
後の世までの鑑ぞ』と
今なほ常磐の松蔭に

『世の泰平に馴れくゝて
日本國の武士と
命を捨て行たるの
すあいち給ふ五萬石
駒とめ石の名ぞ高き

花うばら (明治廿五年六月父君一周祭の時)

ふしどの中にましながら 去年の見まし、花うばら
今年の夏も咲にけり 折て手向けん御靈舎に

さはし柿 (同年の冬千葉に赴きて八幡にて)

このまみましつる父君の 世にいましなばあがなひて
わが家土産にちしてんを うまげに見ゆるさし柿

旅まくら (同年の夏安房國北條に宿りて)

たゞかりそめの旅まくら はや廿日にもなりにけり
まだ見ぬ處多かれど 待わびたまはん母君の

磯山づたひ (同じ時布長浦にて)

磯山づたひのたのしさよ 沖ゆく船のをかしさよ
繪の業學べるおとうとを ともなひ來なば此わたり

うしろの岡

嬉しくをへぬ今日の課業 うしろの岡にいざゆきて
つみて歸らん花すみれ 雲雀の歌をきながら
ふく夕風にみだれんも をかしかるらん中々に
髪いむすばぬまゝにても いざ諸共にいもうとよ

櫻貝

道とほけれと浦づたひ 拾ひてゆかん櫻貝
旅あるわれを思ふらむ 我いもうとの家土産に
みどり子

うきふし多き世の中も
忘れはてけりすべて皆

なす事まげき身のうさも
ほゝゑむおもわ見る時

小鳥の歌

たのしき春の来りけり
柳の糸もえそめて

嬉しき春の来りけり
花のおもわゑみそめて

朝日の影の長閑けさに
ともに木傳ふ樂しさと

わがいもうとを伴なひて
兄の小鳥のさゝやけバ

人に知られず打つれて
やよや兄君もろともに

語らふ事の嬉しさと
共にうたはん春の歌

賤のを

東久世通禧

ふるさみだれに袖ぬれて
山田のさあへ植わたし
土さへさくる水無月も
田草とるとて日ざかりに

桃太郎 福羽美静

汝よ 汝 桃太郎
はや其島にゆくならば
その島人をよくなづけ
日本の徳をも蒙らせ



八十四 十一 舎 扉 八

ままの寶をとりかへり
人にも見せて喜ばせ
我等も汝が父母と
まことに汝の君に忠
あらよろこばし桃太郎
我日の本の神代より
さてその國の國体の
劣れる國をよくたすけ
うけつぎませるはかりごと
つぎく物を盛にし
わざのかぎりを盡させん

天皇陛下に奉り
汝のいさを、顯さば
人によばるゝ事ならん
まことに汝の親に孝
汝の心に記臆せよ
御位さかゆる國あるぞ
能ある人をよくもちひ
神武天皇神代より
國をひろめて人を増し
人のまことにつとむべき
千代に八千代に其さきに

桃の花さき實を結び
もしもその間に桃太郎
國の事業を大にせよ
國の事業をあやまらば
さあ働けよ桃太郎
學校勉強かこたるな
小さき事のはめそじり
心にかかけよ桃太郎

限あきまでさかえゆき
議員となれる事ならん
小なる事にそねみあひ
國に對して罪なるぞ
をさなき時の幼稚園
心の器量を大に持ち
それを互にせぬものと
汝のめでたきものなるぞ

日嗣の皇子 (立皇太子を祝ひまつりて)

佐々木弘綱

一段

幼手昌次集 八十五 尊文官義反

顯はれまし、日のみかけ
四方の民草うちなびき
日繼の皇子のさだまれる
千代田寶田千代かけて
天つ日嗣のつきせじな

二段

天の下にのさましくに
國のあれども國といふ
神の御代より日の皇子の
幾よるづ代の末までも
天つ日嗣のつきせじな

つきぬためしと年ごとに
仰ぐだにこそうれしきを
今日を八千代と八ちまたに
祝ふこそるゑとよむあり
やまと島根の動かじな

開け開けてさかえゆく
くにの中にもわが國の
日繼の憲のつたなりて
絶せぬこそいたふとけれ
やまと島根の動かじな

三段

大内山のもみぢ葉の
くもゐの庭の白菊の
菊も紅葉もとりくりに
春の宮居のはるめきて
天つ日嗣のつきせじな

四段

吉日のあまたひとせに
天つ日嗣の日の皇子を
よき日あらじとよき人も
千代萬代とひなみやこ

綾にしきとも見えぬなり
星かゆきかどまがふなり
色もにはひもたいあらぬ
小春のそらぞのどかなる
やまと島根の動かじな

ありとにいへど大君の
定めましたる今日ばかり
いやしき人もおしあべて
祝はぬ方こそあかりけれ

天つ日嗣あまひつぎのつきせじを

やまと島根しまねの動うごじな

清少納言

すだれかゝげしあさの雪ゆき
さるものなしといひけんも
わか紫むらさきのいろふかさ
なさけもさえも籠こもりたる

草くさのいほりのよるの雨あめ
門かどを高くといひけんも
色いろにおとらず染そめなして
ふでのすさびぞ類たぐひなき

千代のかざし

原田嘉朝

雪ゆきにまがひてさくときも
かはらぬ梅うめの色香いろかこそ
やまとにしき

蝶てにならひてちるころも
千代ちよのかざしといふべけれ

佐々木昌綱

雨あめのあしたに來きてみれば
もみぢしてけり瀧たきの川がは

さしの梢こすねのおしあべて
から紅くわなるの色いろふかく

とつ國くに人もつとひ來きて
下したゆく水みづにうがひたる

木この下した蔭かげにめづるなり
やまと錦にしきのゆかしさを

治まれる代

(天長節を祝ひて)

治をさまれる世よの時ときつ風かせ
まげりそひゆく民草たみくさの
あなめでたの君きみが代よや

枝えだもあらすのどかにて
靡なびかぬ方かたこそなかりけれ
あなうれしの君きみが代よや

まなびの道も亦す業も
わが大君の玄さませる
あなめでたの君が代や

いやすゝみつゝ榮えゆく
やまと島根ぞうごきあき
あなうれしの君が代や

その大君のあれましゝ
天つ日の旗軒ごとに
あなめでたの君が代や

今日けふの生日いひの足日たひぞと
かゝげて祝いははぬ宿よぞなき
あなうれしの君が代や

教をしへの庭にはのをさあ子こバ
御園そのの鶴たづも松風まつかぜも
あなめでたの君が代や

皆君みなが代よをうたひつゝ
ともに千歳ちとせをよばふめり
あなうれしの君が代や

をさな子

學まなびの庭にはのをさあ子こよ
いそしみ學まなべ日々ひひの課業わざ

幼わかなきはせのひたすらに
み國くにのためぞ國くにのため

學まなびの庭にはのをさな子こよ
世よにたてよかし功績いさをしを

人ひととなりあば諸共もろともに
み國くにのためぞ國くにのため

學の窓

井上喜文

やさかふりつむ雪ゆきの日ひも
學まなびのまどにささいでゝ

寒さむさをよそに梅うめの花はな
はげむ匂におひぞいさましき

四季今様

年のはじめになりぬれば
たてたる松にふく風の

門てふ門にまめはへて
千代呼かはす聲すなり

田崎孝榮

夕風わたるすみだ川
はたるの影の水の上に

三つよつ二つみだれどぶ
移れる見るこそ涼しけれ

月の光も身にしみて
山にさを鹿野べに虫

千草八千草うつろふに
寂しさたへぬ秋のくれ

時雨の晴れて風あらく

あられのやみて雪つもり

めづる草木のかれ果て

冬ごもるこそさびしけれ

衛生

角田佳一安房

よしやなす業秀づとも
常にわが身にこゝろして
道あわすれそ東の間も
身の滋養にゐるものも
身をそこかはん基ぞかし
道なわすれそ東の間も

わが身弱くの甲斐どなき
朝あ夕ななに衛生の
あまりに多くすこしなバ
幼なきはせより衛生の

年のはじめ

西升子

年のはじめのともがきを
うたげにゑはぬ人もなく

芝生の堇

野邊とめくれば雲雀なく
蝶のゆくへををどめ子が

海邊暮景

夕日の影もどく落ちて
沖邊にうかぶ釣舟も
哀をかしきながめかき

訪ひみどのれみ祝かはし
むつびあふこそ樂しけれ

芝生のすみれにはふなり
とめゆく様もゆかしくて

竹屋雅子

鳥もねぐらにやせるなり
岸べをさしてかへるあり
いそ山本の夕まぐれ

夕けのまろか薄けぶり
いづこの里の寺ならん
あはれ悲しきながめかな

遠方村にたてるなり
夕べの鐘の音すなり
いそ山本の夕まぐれ

寄せてのかへす白波の
はるけき沖に漁火の
あはれ寂しきながめかな

おと物すこくきこゆなり
影またゝきて見えぬなり
いそ山本の夕まぐれ

伏見の野路

あはれ源氏のさかりに
頼みし影のきえしより
さまよひいでし悲しさよ

時めき榮えし身あれども
三人のちごをともなひて
袖のなみだも氷りつゝ

身をさすばかりの寒けさよ
さして行方もまらなくに
立ちよる松の下かげも
我身のうさゝい

わはれはだへも氷りつゝ
雪ふりつみて路もあし
すさぶ嵐の音はげし

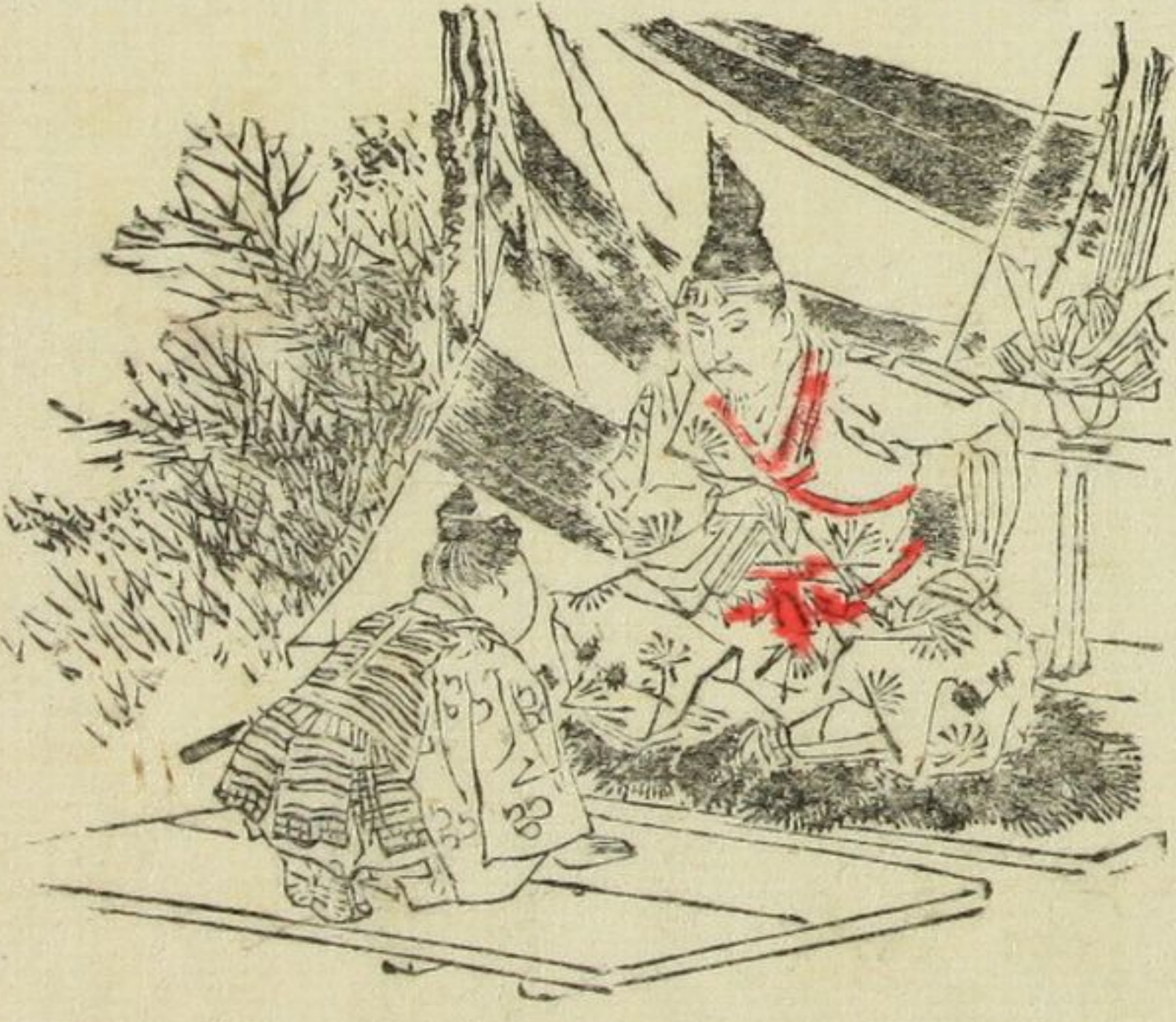
のべども
こゝろて泣く子をい
かにせん
うゑて泣く子をい
かにせん
伏見の路路のゆ
ふまぐれ』



小楠公

其名もかをる櫻井の
はゝのをしへを深くまめ
わらの遊のすさびにも
あやふき谷をわたりつゝ
けはしき山をのぼりつゝ
簇をけづり劔とぎ
軍の業を事として
げに二葉よりかぐはしき
其さまこそ見えにけれ』
時しも延元元年の

驛の遺命かしこみて
露のひるまもおこたらで



十とまり二ふたつの月つきなりき
 吉野よしのの奥おくにいであし
 一族いちぞく郎らう等たう引きつれて
 尙なほ國くに々々に勤きん王わうの
 多おほかりければ聖せい運うんの
 其その甲か斐ひなくてかあしくも
 帝みかどの雲くもにかくれます
 乱みだれたる世よをうれはしく
 君きみの御み心こころはかりつゝ
 かれ尊たか氏うちを一ひと討うちに
 おもふ心こころのまさりつゝ

天すめらみこと皇みことのかしこくも
 ありぬとき、て正まさ行つらの
 かりの宮みやゐに馳はせゆきぬ
 いくさを起おこすやからさへ
 ひらくる時ときとよろこびし
 よとせの八月はつぎに後ご醍たい醐ごの
 時ときに正まさ行つら十じう四し歳さい
 のこし給たまへる詔みことのも
 君きみの敵あたはた親おやのわた
 亡はろしてんといとしく
 忠ちゆう勇ゆうすぐれし軍つはもの兵へいを

かなたこあたに出いしつゝ
 頃ころの正しやう平へい二に年ねんの冬ふゆ
 數す萬まんの兵つはものよせて來きぬ
 父ちち正まさ成しげの遺い訓くんをバ
 弟あとうと正まさ時とき諸もろ共どもに
 此この世よの限かぎりと龍りう顔がんを
 先さきの帝みかどの御ご廟びやうある
 かねて思おもへん梓あづさ弓ゆみ
 よろひの袖そでをまばりつゝ
 あくれば正しやう平へい三さん年ねんの
 四し條じやう畷なひてにおしよせて

まば、敵てきをなやましぬ
 高かう師し直なほ將しやうとして
 あわれ此こ度たびの戦たかひの
 はたさん時ときと思おもひたち
 吉野よしのの宮みやにまゐりつゝ
 拜をがみまつりてそれよりの
 如に意い輪りん堂だうに打うち詣まうで
 引ひきかへさじと死しを極きはめ
 涙なみだながらに立たちいでぬ
 正む月つき五いつ日かの朝あさはだき
 菊きく水すゐの旗はたひらめかし

霞の如き賊軍を
追つおはれつ乱れ入り
師直なれと思ひしも
怒り悲しみ且ちあげき
死すべき時に死せざれば
盛ひさしきわか櫻

野褒野が原

のぼ野が原をとめくれば
御陵の松の木間より

内外の宮

物かずとせず戦ひて
やうやく得てし首こそ
偽ありときしより
かくまで武運の拙なきを
父の御名さへけがさんと
空しく散こそ哀あれ

佐々木光子

飛ぶ白鳥のかげもあし
夕月清くさしいでて

百枝の松も物ふりて
内外の宮の隔なく

戀しき故郷

みぎはのさくら二葉三葉
つゝみ傳ひにとめくれバ
水のうきざりや、晴れて
さやけき影をながむれば
年経てすみしふるさとの
かさねの桃も三とせ経バ
波間にうかぶみやこ鳥
わが父母のはらからん

千枝の杉もかげ高し
恵の同じめぐみにて

ちりてあがる、すみだ川
みやこの秋もさびしさの
雲間の月こそ出にけれ
いと心ぞ晴やらぬ
いへをはかれてはや三年
あるてふ物をおのが身
いざ事とはんあつかしき
とへと答へずあそぶなり

野遊

中村慶子

春雨晴れし朝ぼらけ
堇わらびととりくに
長き春日の暮れゆくも
賤のうなるにまじりつゝ

端艇競漕

いづれの船かさきだつと
打守るめりゆく船を

やがて定むる炮の音に

背面の野邊を來てみれば
かへさも知らず遊ぶかり
忘れはてつゝ遊ぶかり
都をとめももろとも

岸につとへる人皆の
のりたる人やいかならん

すみだの川の川浪に

ひいきわたれる喝采の聲

いつくしま

のどけき春の夕まぐれ
來寄する波もかをりつゝ

さびしき秋の夕まぐれ
をじかの聲もきこえつゝ

學の山路

まなびの山路の峻しども
たゆまずあかすのぼれかし

勝ちたる人やいかあらん

富田愛子

お前のさくらさき満ちて
句あつかしいつくしま

宮ゐのあたり霧こめて
月かげきよしいつくしま

こゝろの駒にむちうちて
我あつかしきはらからよ

いたゞき高くいたりなバ
その花はやくたをりつゝ

故郷のはらから

梢こずえをはらふ北風きたかぜの
み雪ゆきも折をり々まじりつゝ

わはれ寒さむしとうづみ火びに
去年こぞのこの頃さうふるさとに

我わがあつかしきはらからと
いまだきのふと思おもへども

句ことばえならぬ花はなあらん
世よにかぐはしき名なをあげよ

音おとさわがしき夕ゆふまぐれ
身みにしみわたる寒さむけさよ

寄よりそひつゝもたちまちに
歸かへりしはらから忍しのばれて

をしき袂たもとをわかちし
はや二ふたとせに成なりにけり

いとよいとしきいもうどの
とほき海路うみぢをはるくと

憂世うれよのちらひと聞きくものを
わひ見みん折をりをまちてんど

又またくりかへし明日あすより
都みやこのさまを折をり々に

かへりゆくべき故郷ふるさとの
幼せきなきおとゝも諸共もろともに

別わかるゝ時ときにいひたりき
たちわかれゆく悲かなしさよ

二ふたとせ三みとせの月日つきひへて
心こころつよげにいひつゝも

たのしき事ことのなきものを
書かきえるしつゝ知らせてと

ひなのほどりと聞きえりて
都みやこをまたふわはれさよ

やよはらからよこき父の
さとしましつる御詞を

病あつしくまし、時
忘れのせじな御詞を

その御言葉をわすれずバ
小さき弟をいつくしみ

母のみことをかしてみて
詞あらしひゆめなせそ

學の園にかよひての
劣らずはげみて師の君の

同じよはひのわらへべに
御教ふかく守りねと

かくさとしつゝ悲しさを
あれよといひて別れし

袖につゝみてすこやかに
夢かどのみもたどられて

晝のひねもす夜のよた
最もか弱き身にしあれバ

心を離るゝひまぞなき
かゝる寒さもいかにかと

まだいわけなき弟の
ひさの手ぶりにならひつゝ

都のわかれなげきしも
いどもをかしと思ふらん

朝とく起てもろとも
いかなる事を學ぶらん

學びの庭にかよひつゝ
をしへの草をつむならん

さてかへさにい友とちと
せとの畑道たどるらん

向の山に遊ぶらん
あはれ樂しや嬉しやと

川べに近き宿なれば
魚をとりつゝ遊ぶらん

まなびの友ともろどもに
かゝる寒さも知ずして

遊びのわざもうみはてゝ
母のかたへに侍りつゝ

夕ぐれざまにありぬれば
いかなる事をあすならん

文の數々ひろげて
ある草紙をとりいでゝ

知らぬところを學ぶらん
鳥のあとをば習ふらん

更けゆく夜半の寂しさに
いかなる夢を結ぶらん

母のみひざによりそひて
晝のあそびや思ふらん

春まぢわびて門のべに
むれてあそべる昨日今日

羽子よてまりと少女子の
我いもうとにいにかあらん

ともにうつしゝ寫眞を
取いだしつゝあがむれば
物こそいはねさながらに
まのあたりみる心地して
贈りおこせし文どもを
又くりかへしよみ見れば
目には姿の見ねども
かたへにもいふ聲のして



朝あさを夕ゆふをにみんあみの
身みにいさゝかも障さやなく

空そらをかがめていのるかき
世よにすくくと生おたてと

母ははのをしへを守りつゝ
はらから共にむつまじく

よしなき友ともにまじらはで
學まなびの奥おくにいたりねと

たへぬ心こころを水みづぐきに
南みなみの窓まどをあけたれば

うつしおかんと書かきをへて
晴はれたる空そらに月つきたかし

隅田川

みどり涼すずしきすみだ河が

岡部虎子

ちりにし花はなの跡あととへば

とめくる人の影かげたえて
過すにし春はるのまのばれて
初音はつねまつちの山やまかげに

堤つみづたひのさびしきに
たゞすむ程ほどに皆みな人の
なのるもをかし郭公鳥ほととぎす

幼き弟に

御代みよの惠めぐみにうるほひて
二葉ふたの小松こまつよ朝夕あさゆふに
霜しもと雪ゆきとにあらそひて
學まなびの光ひかりいさぎよく
こゝろの色いろのいとふかく
雲井くもの空そらにかゝやかし
あらとま風

文ふみの林はやしにおひたてる
庭にはの教をしへをまもりつゝ
たか峯たかねを照てらす月つきのこと
朝日あさひに匂におふ花はなのこと
風かぜにもちらぬはまれをば
ながれての世よに残のこせかし

あらしま風のおどすごとく
おもはぬ岩にのりあげて

さかまく波のはげしきに
さしもの舟も碎けん

聲をかざりに入々の
助を呼べどかひもなし

光たえせぬともし火の
方の何處とわかぬまで

霧たちこめし闇の夜に
そこひも知らぬ海原の

藻屑ときえん今もかも
心ごゝるに天つ神

國の御神をこひのみて



身のさる事といひながら
さての妻子のいかにぞと
その行末やおもふらん

家に残れるちゝはゝの
その嘆をや思ふらん

師のめぐみ

伊藤琴子

我を生しの親なれど
めぐみも深き師の君ぞ
幼きものに世の中の
知りうるまでに諭しつゝ
君にの忠をつくせよと
あつさ教の父母の

親にかはりて教へし
西も東もまだ知らぬ
物のことわり大方の
親にの孝の子となれよ
あく事もなき師の君の
あさけと共に身のかぎり

心のかぎりあふげかし

雨ふる日

日ねもす空のかきくれて

大路に出てなりはひを

昨日も今日も降りくらす

休まへのこる妻子をば

さる人あるをわが身に

たのしき中に朝夕を

これ皆おもへば父母の

この御恵をいかでか

忍が岡

あつき恵をあふげかし

門べに出んも物うきに

いとなむ人こそ哀なれ

この村雨に日々わざ

いかで養ふすべあらん

世のわびしさも知らずして

すぐしゆくこそ嬉しけれ

深きめぐみの外あらず

いつの世にかん忘るべき

南條貞子

花もいつしかちりゆけば

月の夕べに雪の朝

二十年前のあらしも

遊びがてらに音づるゝ

夏の旅路

はちす花さく朝まだき

はたるとびかふ夕まぐれ

夏の旅路もをかしけれ

すいしき蔭にやすらひて

若葉に赤のるほどゝぎす

忍が岡こそをかしけれ

花にかりりて都人

忍が岡こそをかしけれ

とく起いでゝゆけばこそ

月を赤がめてゆけばこそ

日影わびしきひるの間

母のめぐみ

身に年浪としなみのよるとおく
 暫時しばしの程ほども慕したはしき
 折をりにふれての便たよりにも
 恵めぐみもふかきことの葉はの
 物のわかちもまらざりし
 をしへ導みちびきさとしつゝ
 はぐくみましゝ其上そのうえに
 をささき時に異ことならず
 高たかきめぐみにくらぶれば
 富士ふじの高たかねもいかでか

晝ひるともわかずつとめつゝ
 みそば離はなれて在ある時ときの
 まごゝろこめし母ははそばの
 よむ度たびごどに身みにぞまむ
 齡よはひのほどをさまぐに
 朝あさな夕ゆふきに心こころして
 人ひととなりたる後のちまでも
 いたはりたまふ母君ははぎみの
 深ふかきめぐみにくらぶれば
 つくしの海うみもいかでか

親の恩

宮崎英子

うつせみの世よに生おひいでて
 わがめらるべき人ひとたちの
 流ながるゝ水みづのどこしへに
 まもり給たまへるちゝはゝの
 雪ゆきのわしたもまもの夜よも
 いどなみあして我等われらをバ
 つゆあ忘わすれそおやの恩おん
 朝あさあゆふなにかへり見みて
 朝あさ夕ゆふつきせぬみ恵めぐみを

よろづの物ものの靈たまとしも
 露つゆなわすれそ親おやの恩おん
 時計とけいのはりのたゆみなく
 いつとて我われを忘わするべき
 いかなる時ときもいとひなく
 はぐくみ給たまふ恩おんたかし
 つゆな背そむきそ御言みこと葉はを
 つゆないためそ御心みこころを
 つゆな忘わすれそいつとても

孝かろてふ道みちをふみわけて
うすけぶり

御心みこころいためずつかへなん

竹山静子

てらす日影ひかげも影かげうとき
苔路こけぢに人ひとのあともなく
かゝる所ところに世よをさけて
年経としへし杉すぎの木この間まより

此谷このたにかけをきて見れば
鳥とりの聲こゑさへまれなるを
清水しみづと共に人ひとやすむ
たつもさびしきうす煙けぶり

海原

風かぜのますく吹ふきわれて
あるかみさへも轟とどろきて

浪なみのいよく音おとたかし
空そらの黒雲くろくもおほひたり

大塚楠緒子

折々をりひかるいさづまに
物ものおそろしく物ものすこし
雪ゆきかどみしもその昨日きのふ
たけり狂くるへる虎とらのごと
あかおそろしの海原うみはらや
かゝる浪路なみぢを事こととせず
かゝる嵐あらしをこととせず
今いましも光ひかるいなづまに
あな見る内うちに傾かたよきぬ
船ふねにのりたる人々ひとの
怒いかれる浪なみにはふられて

たえぐ見ゆる海原うみはらの
花はなかど見しもその昨日きのふ
岩いばにくだけてちる浪なみの
怒いかり立たちたる獅子ししのごと
あか物ものすこのえら浪なみや
沖おきゆく船ふねやいかならん
沖おきゆく船ふねやいかならん
見みゆるる船ふねの帆柱ほしらか
あか見る内うちに綱切つなきれぬ
心こころのうちやいかあらん
藻屑もくづとなるも今いまえはし

すさぶ嵐にさすらひて
かく浅ましき有さまを

藻屑となるも今まばし
見るも心のきえ入りて

見るもあわれに堪兼て
窓をとざし、其あとの

風のみすく、吹き荒れて
浪のいよくおどたかし』

よべの嵐にひきかへて

かゝみのごとき海原に

朝日はのどさし初ぬ

渚に寄する白浪の

雪か花かどまがひつゝ。

見れば向ひの岩の上に
なかば折れたる帆柱よ

黒きの何とたちよれば

よべ見しふねの帆柱か

遂にかの時くつがへり

底の藻屑となりけん

船のみならばそれもよし

いく百人のあきがら

いかにはがなく成にけん

親に逢はんとふる里に

歸りし人もありぬらん

妻子をあどにふる里を

出にし人もありぬらん

一夜のうちの悲しさを

夢にもえらぬ妻と子の

早く便のあれかしと

指をり數へまつやらん

悲しさえらぬ親の子の

錦を着つゝふるさどに

歸らん程を今日明日と

いかに嬉しく待やらん

この望さへ今のはや

はかなき泡と消はてぬ

よべの風さへ吹ざらば

よべの浪さへ立ざらば

新編 古今和歌集

百二十二

あな恨めしと見かへれば
よべのあらしに引かへて
鏡のごときうなばらに
渚によする白浪の

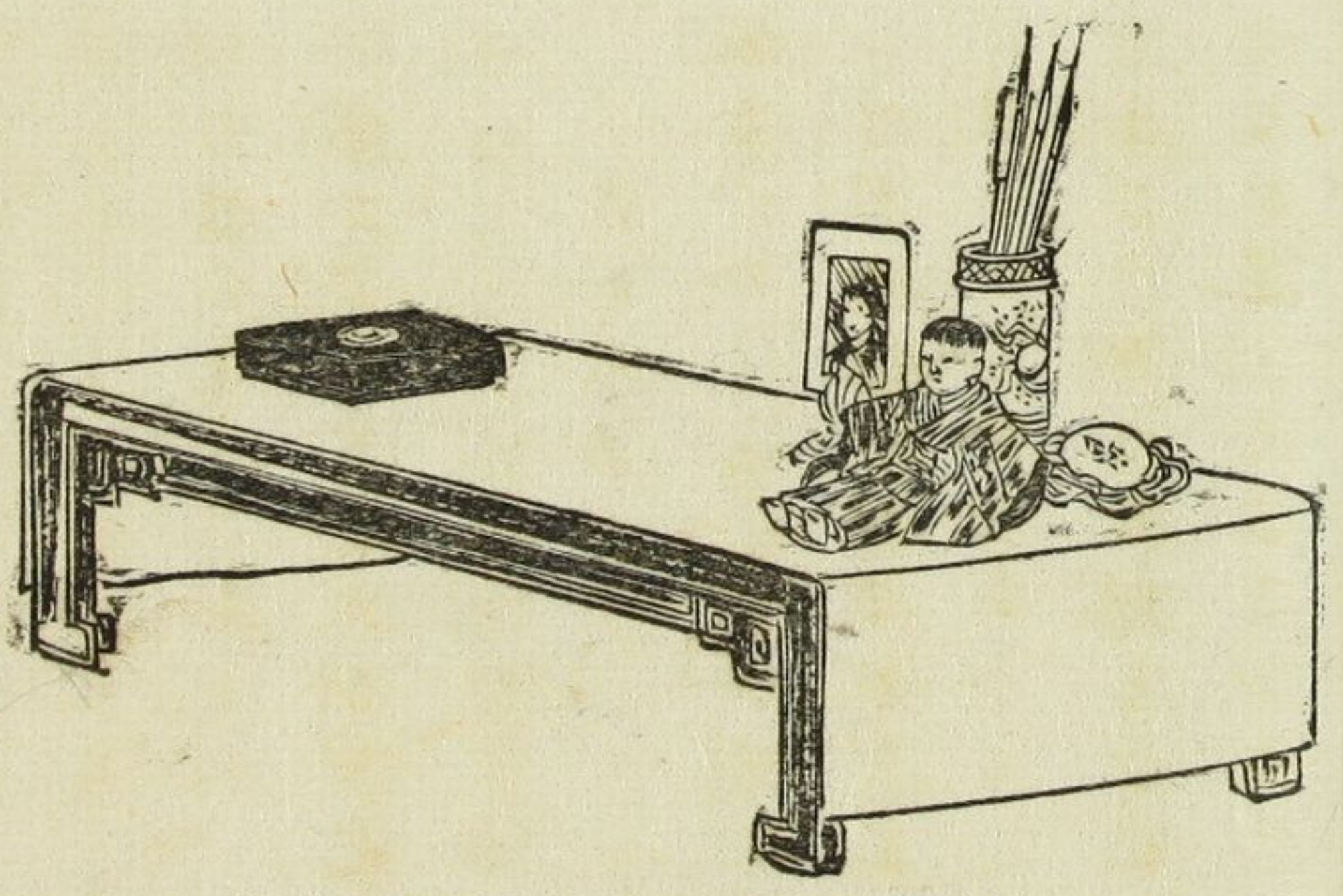
父君

一日二日と思ひしを
旅路にましていつしかも
指折り數へ今日今日と
今日の朝とく歸らんと
車の門にといまりぬ

朝日はのどさし初ぬ
雪か花かどまがひつゝ

佐々木あや子
我あつかしき父君の
十日あまりに成にけり
待渡りつる甲斐ありて
玉づさ來りぬ嬉しくも
あはれ嬉しと急ぎつゝ

走り出れば父君も
車も共に見えすして
はや晝近くありぬるを
いかでかおそき父君の
あまりに待て待わびて
忘れてけりなかの事を
共にゆきつゝ去年の夏
買て給ひし人形を
かの伯母君の寫眞を
机のうへにかざりてん
見せ參らせて褒められん



いかでかおそき父君の

助手昌炊集

百二十三

尊文館藏板

車とまりぬ今度こそ

出むかふれば嬉しくも

お正月

藤島雪子

今いくつねばお正月
紅葉の如き指折りて

明日かわさてか母様と
一つ一夜と嬉しげに

かたへの母の打ゑみて
なとて嬉しく楽しきぞ

いましゝさまでお正月
そのこと母に告げてみよ

お正月にの母様よ
松を立てたり竹たてゝ

御門に大きな旗たてゝ
おうちが立派になる物を

お正月にの母様よ
父様めして御馬にて

いつよりきれいな洋服を
一番立派に見ゆるもの

御正月にの母様よ
皆の中でいつよりも

うちの伯母様母様が
一番きれいな見ゆるもの

御正月にの早くより
御箱の中へいつよりも

御文と名札が玄関の
澤山くたまるもの

御正月にのうつくしき
車に乗りて来たまひて

伯母様たちが幾人も
御遊しまえよといふものを

御正月にハ母様よ

此程買ふてたまはりし

羽子板もつて羽をつき

梅もまかささんお花をも

羽子つく前に早く起き

御湯にはいりて御化粧し

三枚がさねのきぬ着かへ

御正月にハ母様よ

かるたや福引御茶ぼうず



かんざしさをしてきれ掛けて

晩になつたらすごろくや

面白いことまだあれど

母のまじめに御正月

遊ぶばかりがうれしとか

玄バしためらひ幼女の

くるのが何より嬉しきハ

母のすこしく笑ひかけ

御年のふゆるが嬉しきぞ

母様忘れ給ひしか

御辨當もつて學校へ

早く來るのが楽しきハ

それより外にまだあらん

をハ母様よ御正月

御年が一つふえるもの

いましハあせに明日より

一つふゆれば何かある

御年がふゆれば母様が

通ハせやるとのたまひき

日毎にゆきていそしみて
いつでも御褒美いたいて

何でも覚えて試験に
褒められよやどのたまひき

いどうれしげに髪撫て
母のいふ事よく覚え

いましの子よいとし子よ
忘れでありしよき子供

御正月に早くより
大きくならば世の人に

學校に行かば勉強し
立派な人よとほめられよ

八時うちたりいま早
明日にあらば衣さかへ

御話しせずとねんねして
羽子も手まりもつきねかし

いつしかねぶりし幼女の
母にほめられ樂しみて

今の夢みて喜ばん
衾かづきし幼女の

ささがけ祝ふ鳥の聲
まらでねぶれるいとし子の

夜もほのと明ゆくを
母の祈らん行末を

雪のあとた

窓おしあけて見わたせば
花かど見えてふりつもる

柳さくらに時あらぬ
雪のけしきのおもしろさ

まことに花の都どの
雪のあしたのながめこそ

かゝる景色をいふあらん
月にも花にも優りけれ

かゝる景色もよそに見て
縊ひやますらんわが爲に

きぬとり出し母君の
おもひますらんわが上を

かゝるけしきを父母の
學びの窓もいままばし

君もろどもに見ましかば
とくいそしみてこん年の

捨子

都のかたに父君の
明日のと思ひいつよりも

母君もまたもろどもに
早くふしどに入にけり

霜夜の風のいと寒く
ゆめか現かをさな子の

肌へもこほるこの夜半に
なく聲すなり我門に

母をうしなひ父にしも
あきいとほしの幼子よ

乳をのまんどねだりてか
父のわびしさいかならん

乳のなけれどあたゝけさ
いとほしの子と戸あくれば

いましの望むものやらん
吹きいる風のたへ難さ

人影あらで軒の下
たえぐになく幼子の

はだへも薄き衣を着て
聲もあはれにきこゆなり

見るにいとく堪かねて
顔さしつけてふどころに

いだきあぐれば嬉しげに
乳もやあるとさがすらん

父母ともにもいませねを
重ね着せさせてねりし乳

まかり給はん事あらじ
とくのませてん此方にて

火かけも見れば美しく
ついでれの衣をまとへども

ゑみこぼれたる顔かたち
よしある人の子あるらん

いづくの人と知らねども
鬼のまわさかそれならで

いかで捨てん此ち子を
涙のみつゝすてぬらん

うき世の中といひあがら
ふり放ちつゝ捨ゆきし

かく美しき幼子を
親の心やいかなりし

まとへる衣の其外に
何をたづさに求むべき

まるしの物もあらざれば
あないどほしの幼子よ

西東さへわかぬ間に
わが二親のおもかげを

うみの親に捨られて
夢にも知らぬいとしさよ

すてのまぬれを堪かねて
やみの夜なるを幸に

すてにし親のいまもあは
此あたりによさまよはん

ねりし乳をばのみはてゝ
いどうれしげに睡るとり

我ふどころに今のたゞ
捨られし身と知らずして

すやくねぶる顔みれば
されど此夜のわが心

いと涙ぞこぼれける
よき事しつとおもひたり

又のあしたの父母の
歸りましにどりあへず
語ればどもに我事を
たへられぬ嬉しさよ

およぶかぎりわが力
つくして育てん親たちよ
生たつ此子の行末を



なれも祈れよかげながら

をたまき

朝山元子

長き春日をくりかへし
花の姿をあつかしみ

見れども飽ぬ苧環の
折てあたへんおとうとに

長き春日もくりかへし
學のわざをいそしまバ

たゆまずあかず心して
清き色香の顯はれん

つま琴

橘系重子

霧のまがきをわけくれバ
調ゆかしくきこゆなり

誰が手ずさびかつま琴の
松の木間に月すみて

人撰友

見よかし水いさまづくに
様々にこそかはるあれ
よきとあしきに随ひて
いとよき友をこゝろして

父母の恵

いそしみまなべ幼子よ
智恵ある者のあらざるぞ
夜ひるたゆむ事あくて
ふかさめぐみに報ゆるを

内村宜子

いる、器のかたちにて
人もおちく友どちの
さまづくにこそ變るなれ
いとよくえらびて交れよ

生れいでたるはじめより
暑さ寒さをいとひつゝ
たとへんかたあき父母の
わするあよゆめ忘るなよ

みちのく

都の空の昨日今日
わが故郷のみちのくの

都の春

長閑に治まる君が代の
角田上野ととりくくに

若草

かすめる空の長閑けさに

横山悦子

霞みそめけり梅さきて
まだ白雪の深からん

櫻村壽子

都の春のにぎはしさ
馬に車にゆきかひて

成田保子

庭にたちいであがむれば

かきたこなたにわか草の
 おのがさまと生いでて
 また來ん秋におのがじし
 えちらぬ色に花さきて
 たいいなづらに生たちて
 をしへの庭にきはひつゝ
 げに若くさのたぐひにて
 勉めいそしめうちる子よ
 名譽の花とさかせつゝ

初鶯

色なつかしくもえいでぬ
 きほひがほなるわか草の
 いかなる色かえめすらん
 愛られちんもありぬべし
 かり捨られんも有ぬべし
 物まなびするうなる子の
 おひ行すゑやいかならん
 ちが行すゑの日のもとに
 外國までもかをれかし

八太光子

はゝゑみそめし梅が枝に
 雪のふる巢に生立し
 轉りつゝも末つひに
 これを思へばをさな子も
 螢をあつめ雪をつみ
 谷の戸いづる鶯に
 ささらぎ頃

なく鶯も谷かげの
 初めの聲もかたなりに
 かゝるゆかしき音をたて
 學びの庭にかりたちて
 心のかぎりはげみちバ
 まされる名をや世にあげん

美濃部貞子 尾張

螢がり

森 策 子同

きさらぎころの夕月夜
 にはもせにちる梅の花
 影なつかしみかりたてバ
 踏べき方こそなかりけれ

夕風すいしく吹わたる
川そひ堤とめぐれば
草葉の露と亂れつゝ
招く團扇をまぬかれて
とびかふ螢のをかしさに
こゝに彼處に打むれて
ぬるゝ
裳すそも
忘つゝ
つとへる少女ぞ數
知らぬ



夕風すいしく吹わたる
川そひ堤とめぐれば
草葉の露と亂れつゝ
招く團扇をまぬかれて
とびかふ螢のをかしさに
こゝに彼處に打むれて
ぬるゝ

裳すそも
忘つゝ
つとへる少女ぞ數
知らぬ

つとへる少女よ心して
夜ふけぬ程にとく歸れ

千歳の秋

さし入る月も影清く
まがきの菊を友として

矢矧川

關の東にかゝやきし
昔忍べバ今も猶

鏡の浦

携へし籠にみちずとも
母のみことの待ちまさん

辻多豆子三河

憂世を知らぬ宿なれば
千歳の秋をや過さまし

辻敷子同

弓張月のかけ見えて
水の音高し矢はぎ川

汐あひ人のつとひきて
朝風涼しくわたるあり

吉田敏子安房

いとにぎはしき朝ぼらけ
鏡の浦のうら波に

汐あひ人のかへりつゝ
ゆふ月清くうつるなり

いともさびしき夕まぐれ
鏡の浦のうら波に

門田のいね

小原正子同

門田のいねのかしなべて
朝な夕なに賤のをが

色づきにけりうれしくも
心づくしのほとみえて

門田のいねのかしなべて
朝な夕なに賤の女が

刈りはてにけり嬉しくも
心づくしのかひありて

沖の嶋

吉田信子同

沖の嶋べの磯馴松
たへぬ暑さを忘れんと
濱あでしこの下陰に
色あつかしき此花の
この松陰の涼しさを

梢をわたる波風に
船をよせつゝ休らへば
今を盛とにはほとあり
手毎につみて歸らまし
なす由もがな家づとに

都のつと

高木ゆう子同

籠にみちにけり嬉しくも
浦わづたひに拾ひてし

玉川

まぢかく見えし不士のねも
つゝみの柳けふるあり

姉君

姉君共にいざゆかん
にはへる花の下かげに

屋嶋の浦

都のつとに朝なく
梅のはち貝さくら貝

島田たか子 武藏

霞のおくにありはてゝ
玉川づたひとめくれバ

島田愛子 同

いざ諸共にかの岡に
雲雀の聲こそ聞ゆなれ

伊藤詮子 相模

屋嶋の浦のゆふ風に
かたぶく日影うすらぎて

あぎさにむけて一そらの
年まだ若きにようぼうの

日出でたりける紅の
ふねのせがいに挟みたて

あれ美しくしと矢おもてに

ひらめく旗の色見れば
さかまく浪のみ音すこし

かざれる小舟よする見ゆ
やなぎの五衣に緋の袴

扇をたかく竿に結ひ
陸にむかひてまねくなり

大將軍の進みなバ

てだれねらひて射らんとや

はかれることの愚かさよ

われよりさきに扇射て
味方のうちに誰かある

おどさば敵やおどろかん
手垂のはまれ得んもの

そら飛ぶ鳥をあらそひて
手さゝのはを人も知る

三つに二つの射おどすと
那須の興一のはかになし

撰り出されしむねたか
萌黄おどしよるひ着て

赤地のにしきのひたれに
まげどうの弓わさばさみ

いとたくましきくろ駒に
たづなかさくり白なみの

金ふくりんのくら置きて
寄するみぎはに歩ませぬ

まださえかへる二月の
舟のゆりあげゆりすゑて

風のはげしく吹きたてば
浪のまにくたひよひぬ

おきにい平家いちめん
くがに源氏くつばみを

ふねをつらねて眺むれば
ならべて近くこれを見る

あはれ神明願はく
もしもあやまつ事ならば

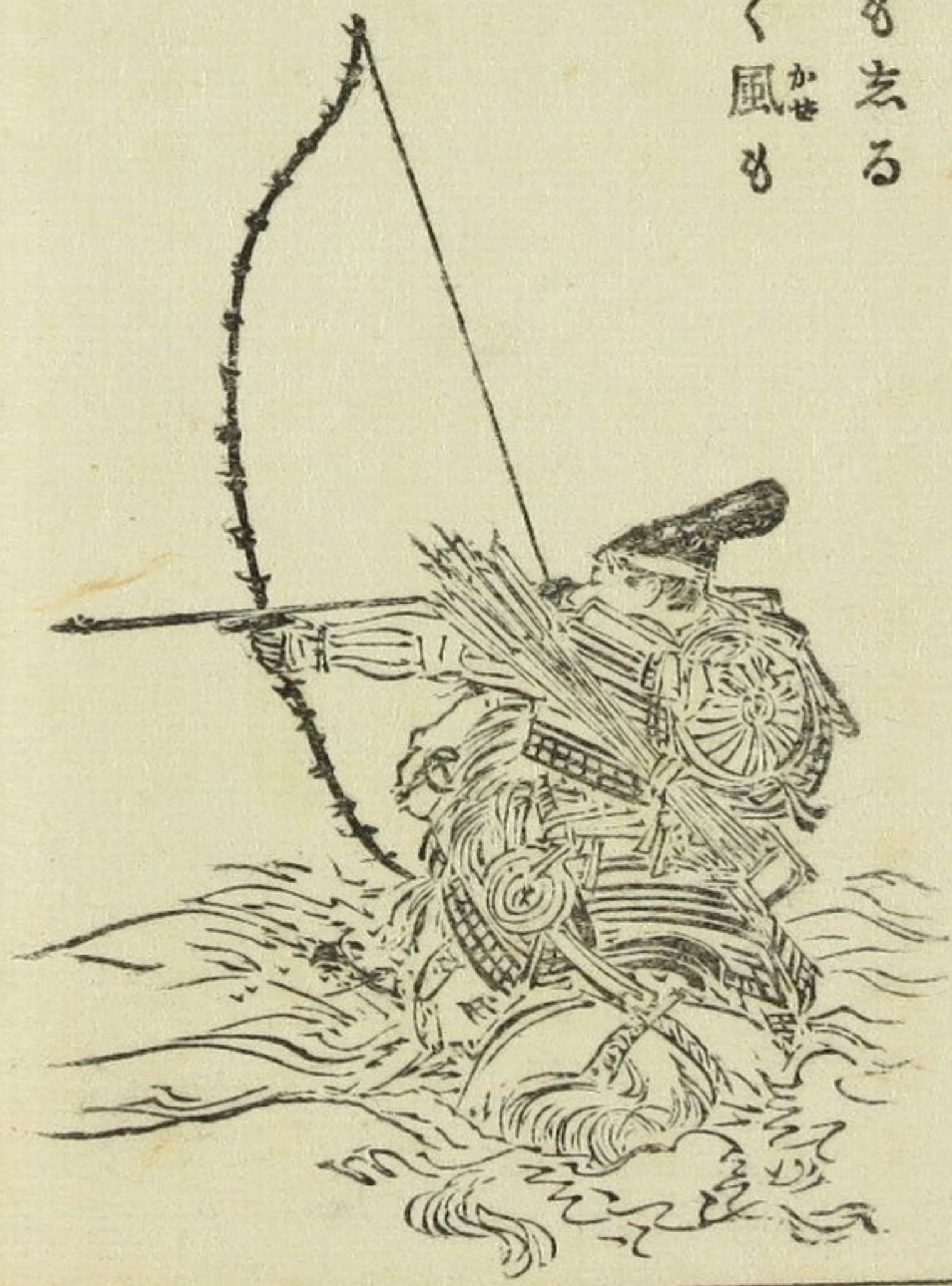
あふぎの真中射さしめよ
わが耻のみか味方まで

ちがく弓矢のきずとなり
弓折りくだき矢をも捨て

人にむくべきおもてなし
うせんと思ふわがこゝろ

いのるまことの神もまる
まなこひらけば吹く風も
すこし弱りてあ

ふぎさへ
射よげに見ゆる
嬉しさよ



矢ころはかりて射放てば
浦ひいくまでかぶらおど
ながありまつゝ、紅の
わふぎの空にうち舞ひて

一もみ二もみ春風に
もまれてさつとなみの上
おつるゆふ日の影とめて

くがにの源氏をびらうつ
おきにい平家ふなばたを



うきみ沈み、ゆられゆく
音さわがしくとよめきて
たゝきてはむる聲たかし

十字詩

わかしの浦のあさぎりに
寄せくる浪もたかさごの

とほくなりゆく淡路がた
尾上の松にふくあらし

あとに幾重のやま川を
久米の佐羅山さらくくに

すぎさか越えて美作や
知らぬ出雲の見尾みちと

かりの御宿のあさぼらけ
見つゝ心をくめとてや

庭にたちたるさくら木に
ゑるしどめける十字の詩

ひかし越王吳のために

うちまかされて降りしも

范蠡ありて會稽の

耻をばきよくすゝぎけり



みだれくしかりこもの
わが大君をやすめんと

世にもいのちを捧げつゝ
心をくだくやさしさよ

これをおもへば沖どほく
早くみやこにたち歸る

かすみて見えぬ船路にも
夢を見るこそうれしけれ

悪魔

といろきわたる大砲の
ひらめく太刀の光にも
ますらをさへも大かたの
悪魔といへる敵ぞかし
劔もたちも持たねども
はたあやしくて形なく

音にもさらにおどろかず
ためらふ事なたえてなき
うちかちがたき大敵の
そもこの敵のゆみも矢も
持つにもまして恐ろしく
聲もかければせめよせて

小花貞三 東京

前にあれども目に見えず
いつかわが身の捕はれて
かゝるあやしき敵あれば
あまたの人のおそはれし
まばしもたゆむ事なくば
そのおそはれし時々の
かの中將が勾當の
かの玄宗が楊貴妃の

うしろにをれを聞えねば
とりことなるも思はえず
ふせがん事もかたけれと
其ときくをこゝろ得て
敵もせんかたなかるべし
おもあるものを敷ふれば
内侍の琴をきし時
色をはじめて見てし時

荒川のべ

荒川のべをとめくれば

岸ふく風の涼しさに

大原恒齋 武蔵

芦の葉がくれ水鶏をく

聲もほのかに聞ゆなり

浮間の萱野

朝日重光同

浮間の萱野も春くれバ
句ゆかしとふりはへて

咲みちにけり櫻草
都の人もとめ來つゝ

あすり山

松平康秀同

松の木間にさく花の
長き春日も暮れにけり

えちらぬ景色見る程に
明日も訪ひこんあすか山

我菴

大木永信同

軒端に通ふ松風の
千町田遠く見渡して

憂世の塵を拂ひつゝ
心もすむか我いほり

志づや志づ

高橋有寛東京

立ちまふ袖も露おびて
吾つまおもふまごゝるり

繰返しうたふ賤や志づ
鎌倉山もうごくなり

皇國の爲

光かゝやく日の本

こと國々にたぐひなく

千代も八千代も一すぢに
仰げばたふとき日のみ影
伊勢の海より猶深く

かはらぬ君を仰ぐあり
あまねき國のみ恵の
駿河の富士より猶高し

四千餘萬の同胞よ
まごゝろこめて諸共に

大和魂みがきつゝ
皇國の爲につくすべし

日曜日

武田櫻桃同

樂しき今日の日曜に

雨もふらねば風もなし

いましわらべよ汝等が

遊ばん日なり遊ぶ日ぞ

近きわたりの野にいでて

若菜つむども又さらに

小川に魚をあさるとも

好む業して遊ぶべし

されど兒童よく聞きね

父母いますらへからの

とほき里に遊ぶとど

聖人の教もあるものを

夕暮つぐる鐘の音と

共に家路にかへりきて

暫しつかれを休めつゝ

またも課業を勵むべし

學の窓の雪よりも

遊びの庭の花一枝

好む人の情なれど

雪の白きにうみてこそ

花の紅さもかしけれ

かのが勤勉をよそにして

徒らに日を送りなば

此樂しみいあかるべし

やよやをささ子

南莊俊之同

やよやをささ子汝等が

わが日の本のみ光り

うまれし國の日の本ぞ
外國までもかゝやけり

世界の廣しひろければ
めぐみにあへる國民の
されば幼子もろ共に
大和ごゝろのいさをしを

此ならびなき大御代の
われらの外になきぞかし
わが君のため國の爲
えめせよ示せ諸共に

やよやをさな子汝等を
そもちゝはゝの御惠の
鳩も三枝の禮をなし
ましてわれらの萬物の
さればをさな子諸共に
深きめぐみに答へんと

そだてしものゝ父母ぞ
鳥けものまでよく知れり
羊もひさをまぐるあり
中にすぐれし人あるぞ
山よりたかく海よりも
つくせよく諸共に

やよやをさな子汝等の
ひかしの人もさま々に
よもぎもあさに交れば
白きいさごも黒すなは
されば幼子もろともに
よき友垣を得んものと

善き友がきを撰べかし
そをいまして言おさぬ
つひにいなほく生るなり
交れば黒くそむぞとよ
たゝかりそめの遊にも
撰べよえらべ諸共に

やよやをさな子汝等の
はまれの園に種まくの
鸚鵡のものを話せども
猿のかしこくふるまへど

學の業をはげむべし
今より外にあらぬなり
鳥のすがたの免かれ
獸をのがるゝ術をなき

されバをさな子諸共に
後の世までも残さんと

人と生れしいさをしを
願めよはげめ諸どもに

やよやをさち子汝等の
遊ば、こゝろ樂しくて

まぢびの隙によく遊べ
書讀むつかれ消るあり

野山のおもに遊ばんも
あるハ手鞠に目を暮し
されバ友をバ先えらび
忠と孝とにこゝろして

花さく園にながめんも
鬼ととするも又をかし
共にまぢびつ遊びつゝ
朽ぬはまれを世に残せ

君の爲

樹谷淳 孝同

ほゝゑみそめし梅の花

世の人ごとにめでぬるハ

霜にたゆまず雪にだに

かはらぬ薫をめぐるなり

いけの汀のひめ小松

二葉より猶千代までも

みどりひさしく色かへぬ

操を人のめぐるあり

あはれ多くのうなる子よ

たどへていはハ汝等の

若木の梅のこがらしに

吹き荒さるゝ身ありかし

この世の中の有さまハ

月日と共にひらけゆき

ふみの林ハかく深し

そをたどらんハ童子よ

たどりゆかんいと苦し

ゆふべにたてし眞心も

はかなく消る朝がほの

露とひとしき人多し

されどうなる子なれ達ハ

一たびたてし眞心を

かへず勤しみいかばかり
 まなびの庭の廣くとも
 夏のほたるに冬の雪
 かゝるいそしみする後の
 とつ國々に清き名の
 わはれおほくの少女子よ
 えらべの道いつとひと
 されば少女子とりわきて
 忘れずはげめ文のみち
 一たびたてし操をバ
 人に笑はれおのが身の

文のはやしの繁くとも
 たどらばいつしか進むべし
 わつめてまあべ文の道
 さながら梅の香もたかく
 ほまれに遠くにはふなり
 わさあ夕赤に糸たけの
 ふみ見ぬもの甲斐もなし
 飾るすがたともろとも
 正しくたもてこゝろをバ
 敗らば後の世々までも
 こよあき耻となるぞかし

あはれうなる子善く聞よ
 虎の死とも後の代に
 わが日の本のむかしより
 をしまず盡し、人多く
 げに名いれもく身いかるし
 あはれうなる子はた少女

運動會

仇なす者

あすかの山に旗たて、
 そでよにはへる櫻こそ

あはれ少女子よくきけよ
 留むる皮いいさぎよし
 君の爲にいのちをも
 その名に世々に残るかり
 たとへよはひん若くとも
 君のために残せ名を

日高重徳同

たはぶれ遊ぶうなるらが
 やまとごころの花と知れ

仇なすものにさからはで
長閑にそよぐはるかせに

御國のため

三輪文信同
いそしみ恵めやよ子供
かたきこほりも融るなり

さみと親とのいと深き
稚けなきよりこゝろして

學の道

島 養之同
めぐみの海山かぎりあし
みくにのため名を揚よ

同じ學びの道わけて
ともに親しくおひ立て

中山祥直同
日々にかよへる幼子よ
盡ぬほまれを世にのこせ

みづと魚とのなからひを
さてよくむつびてよく遊べ

高きほまれ

心となしてよく學べ
野にも山にも諸ともに

いでやをさな子心せよ
あす業もなくいたづらに
たかきはまれを得し者

西山是雄同

いかある人もはじめより
時をすこしてそのうちに
この世の中になきぞかし

さればをさな子思ひみよ
親のをしへをよくまもり
さてその後らうるはしき

むかし名だかきその人も
學の道をいそしみて
世のかいみどの成しなり

さればをさな子もろ共に
身みのおこなひを慎つしまば
如何いかなる高たかきはまれをも

よろづの事ことにこゝろして
あまたの人ひとにめでられて
えられぬ事ことのなきぞかし

さればをさき子こ心こころせよ
かしこき人ひとをのりとして
身みをつゝしみてさて後のちに

こゝろも清きよさいにしへの
親おやのをしへを善よく守まもり
高たかきはまれをあらはせよ

なれらの身

なれらの身みこそ尊たよとけれ
こよき寶たからのこのちごと

玉たまもこがねも何なにかせん
なれらの親おやのいふものを

加納豊彦同

なれらの身みこそかしこけれ
この日ひの本もとの世よ嗣つぎぞと

朝あさ日ひに匂におふさくら花はな
世よの人ひと々々いふものを

なれらの身みこそいみじけれ
これぞこの世よの神かみなると

なれらの眠ねれる様さまをみて
とつ國くに人ひとのいふものを

やよやをさな子こおもへかし
ほまれある身みのいかでか

かくほまれあるおのが身みを
あだに此この世よをすぐすべき

たのしき春

いとも寒さけくふりつもる

み雪ゆきの中なかにたゞ一ひと木き

家城謙三伊勢

色香すぐれて咲きいづる
まなびの道もさまじくに
たゆまずあかず勉めなバ
をさな心

園生の梅を見よ子供
くるしみ數多ありとても
たのしき春ぞやがてこん

金子專太郎 近江

をさなごころの玉なれや
學びの窓に磨きつゝ

低きにまろぶこと多し
平らけき道歩むべし

をさあごころの玉なれや
學びの窓に磨きつゝ

吹きくる塵に曇りなん
清き友とち撰ぶべし

露 霜

藤井静子 東京

千草の花もなく虫の
さびしき庭にたゞひとり
いたゞく霜にれく露に
あゝをさな子よ白菊に
露もわが身のくすりあり
この露霜にくづをれず
いとかぐはしき句より
あゝをさな子よ玄ら菊に

聲もいつしか枯れはてゝ
咲きにはひたる菊の花
たゆまぬ様こそ尊とけれ
一歩もゆづらずよく勵め
霜もわが身のくすりなり
學ばゝつひに白菊の
はるかにまされる譽えん
一歩もゆづらずよく勵め

母の心

磯部百三 伊勢

燒野のきいすよるの鶴
毛衣よりもあたゝけき
笑へばものをいはせまく
よる年なみもえらさぎの

都の友

思ひいづれば三とせあど
打ちつれだちて遊びてし
たらちねこそい異なれど
いともえたえく語らひし

子をおもふたゞ一すぢに
母の心のあつぶすま
這へば立てとていつしかど
頭の雪となるぞかし

遠藤元代 甲斐

學のにはのはなぞのに
みやこの友ぞなつかしき
心のおちじかどいひの
彼の友がきぞえたはしき

花ほとゝぎす月に雪
雁のつかひにことよせて

をりくごとの音づれい
絶ゆる時こそなけれども

三つの春あきすぐる間に
みじかき筆にいかにして

積りし千々の事をしも
残る方なくかきつけん

こひしき友のおもかげい
とりかはしたる寫しを

たもとわかちし其ときに
朝ゆふちがめくらせども

山かはとほくへだつれば
又もろともに見ん事の

むかしあそびしかの庭を
かきはぬこそいわびしけれ

おもへばいと胸せまり
ひんがしさして飛ぶ鳥の

涙にまめるわがそでを
翼にかふるよしもが奇

孝

朝野ゆき子東京

雲井にたかき富士の嶺も
かぎりえられぬ父は、の
譬へんかたぞなかりける
世にますほどのち、母の
或いむつがりの、しりて
苦しめまつることおほし
されど幼子いつまでか

船路はるけきわたつみも
その御恵にくらぶれば
恵もそれとえられぬが
あるのうらみて腹だちて
かくてあるべきいつしかも

かひ立ぬればち、母の
くゆる心のいづべきぞ
わかれますつりて其のちに
かよバぬものぞ幼子よ
いませるうちに仕ふべし
我かひささの長くとも
短かきひまぞこゝろして
おやを慰さめたてまつれ
孝といふ字のおもかげの
子の務てふ文字おれや
こゝろつくして仕ふべし

恵のほども身にまみて
仕へんものと悔ゆとても
よく心してふたおやの
父と母とにつかへんの
をさなごゝろに相應しく
老ぬるおやをたすくべき
いそしみはげみ親のため

古今和歌集
卷之八
百七十四

百七十四

古今和歌集
卷之八
百七十四

善き事すればよきことの
されば幼子おん身らが
又よきちごのいでくべし
夫のみならでよき種を
いへも富裕になりはひも
うからやからも榮ゆべし
されば幼子おん身らが
親のおほせにさからはで
こゝろをこめて仕ふべし
ひじりもむかしいひ置ぬ
おやに仕ふる事なくば

また報いくるものぞかし
おやとなりなんその時に
まさし人におのづから
やがて幸のみうちついき
こゝろひとつぞ心して
つきぬほまれを殘さんと
百のおこなひありとても
人のおもてをつゝみたる

けものにかはる事なしと
あゝをさな子よ父母に
ふた親いますそのうちに
つかへでいつか仕ふべき

雨夜懷舊

つかへん時の今なるぞ
つかへでいつか仕ふべき

海老原幸同

往きかふ人の跡たえて
窓うつ雨もまめやかに
寐られぬまゝにたい獨
思ひいづればいとしく

ねよどの鐘の聲すあり
まどのともし火ほの暗し
机にむか火こし方を
はかなく過し悔しさよ

筑紫の配所

勅撰
古今和歌集
卷之八

百七十五

古今和歌集
卷之八
百七十五

河井袖月和泉

東風ふく春のきつれども
なくく歸るかりがねよ

住みしみやこの忍ばれて
我うき事をかたりこよ

此身のつみのまらぬ火の
わがぬれぎぬの乾かねど

つくし、こども水の泡
こゝろの底の月さよし

川べの花もとき來れば
昨日の今日とかはる世に

風にふかれてながるめり
かはらぬものわが心

朝な夕あにさゝげもち

かをりを慕ふころも手の

あやにかしこき大きみの

めぐみの袖にあまるなり

神と君

土屋廣磨美濃

神の世のおやあら尊しや
尊き神もかしこき君も
そだてたまへる我父母も
神と君との恵によりて

君の世の主あらかしこしや
守りたまへる我身ぞや
教へたまへる我師の君も
守りたまへる我身ぞや

積少成大

神ならぬ世の人の目に
積りてゆけばやうくに
山どもなりていちじるし

みえぬばかりの塵ひぢも
たかくそびえて雲のゐる
夕風わたる草の葉に

消ゆかど見え^ちて散る露も
 淵ともなりてかくれなし
 よろしきわざも怠^{おこた}ず
 心にゆるすみそかごと
 おほろか人^{ひと}のくもりたる
 玄のびくとに常^{つね}となる
 基^{もと}とこそいなるべけれ
 眞^{まこと}心もちて人^{ひと}知らぬ
 神^{かみ}ならひつゝ常^{つね}となる
 鑑^{かたみ}となりぬいざ子^こども

枇杷の花

玄たゝるまゝに底^{そこ}ひなき
 世人^{よひと}の知らぬいさけき
 あすべかりけり我^{われ}さへも
 やむべかりけり謹^{つと}しみて
 玄が心^{こころ}より答^{こた}あしと
 まがの小事^{こごと}も身をくたす
 かしこき人^{ひと}のあきらけき
 よ事^{こと}をつみて神^{かみ}あがら
 まさし小事^{こごと}も名^なをてらす
 いざ人^{ひと}皆^{みな}よつとめよや

錦^{にしき}と見えし秋^{あき}の野も
 蟲^{むし}のこゑと哀^{あはれ}なり
 風^{かぜ}のまに木^{この}葉^はちり
 かくもろくの草^{くさ}も木^きも
 かをりゆかしき枇杷^{びわ}の花^{はな}
 玄のぎて咲^さけるいさをし
 人^{ひと}もさながらこの如^{ごと}し
 たゆまず倦^{うま}ず學^{まな}びな
 薫^かれやかをれ君^{きみ}の爲^{ため}

伊藤園生愛知

千^ち艸^{くさ}みあがら霜^{しも}がれて
 雲^{くも}かとみえし山^{やま}の端^はも
 冬^{ふゆ}の山^{やま}里^{さと}ものすぢし
 枯^{かれ}にし庭^{には}に雪^{ゆき}うけて
 いとも寒^{さむ}けき北^{きた}風^{かぜ}を
 よき實^みをこそい結^{むす}ぶなれ
 人^{ひと}の怠^{おこた}るそのひまを
 よき名^なを殘^{のこ}さん後^{のち}の世^よに
 學^{まな}べやまなべ國^{くに}の爲^{ため}

賞品授與式

知るやまららずや幼子よ
 皆うるはしき衣を着て
 よろこび顔に顯はれて
 父と母との之を見て
 父上はじめ母上も
 このたまもの幼子が
 父と母とによくつかへ
 いそしみ學べをさな子よ

生徒

小澤一郎 黒澤尻

増田 淺一 初木十四年
 今日いかかるよき日にか
 手々にたまものさげつゝ
 家路にかへる嬉しさよ
 何をかいはんをさな子よ
 ともに喜びたまふらん
 學びの庭によく勉め
 常につとめしてがらぞよ
 やよや勉めよいとゞしく

をさな心をたどふれば
 みかけよみがけもろ共に

年九つ朝

たのしみ多き新玉の
 いつしか色をえめすなり
 庭にさへづる小鳥さへ
 ことほぐ今日こそ樂しけれ
 祝へや祝へもろどもに
 我大君の大御代を
 うたへや謠へいざやいざ

まだみがかざる荒玉ぞ
 ひかりあらはに世に出ん

金原長八 靜岡十三年
 年九つ朝と梅の花

千代に八千代に君が代を
 天つ日影のくもりなき
 我おほ君の萬代を

古今和歌集
卷之八
百八十二
伊豆原倉二三河

我^{わが}おほ君^{きみ}の萬代^{よろづよ}を
かすめる嶺

伊豆原倉二三河

おぼろに匂^{にお}ふ月^{つき}かげの
軒端^{のきべ}にちかき梅^{うめ}が枝^えの

かすめる嶺^{みね}にかたぶきぬ
夜^よふかき窓^{まど}にかをりつゝ

春の野

永井彦助大隅

わか草^{くさ}つめや春^{はる}の野^のに
やよ幼^{おとな}兒^{なご}よこゝろをバ

まなびの窓^{まど}のいとまにて
いでてやしあへ春^{はる}の野^のに

緑のかげ

花^{はな}のなけれと夏^{なつ}の日^ひの

木々^{きぎ}の緑^{みどり}のえただれり

すいしき風^{かぜ}の宿^{やど}るなり

ふみ讀^よめみどりの其^{その}蔭^{かげ}に

牽牛花

高橋 恭仙台

やよ幼^{おとな}子^{なご}よ朝^{あさ}なく

とく起^おきいでて見^みよかしあ

庭^{には}のまがきにまつはりて

いつの程^{ほど}にか咲^{さき}にけん

いどうるはしく牽牛花^{あさがお}の

色^{いろ}あざやかに六^むつ七^{なな}つ

花^{はな}の色^{いろ}さへ昨日^{きのふ}にも

まさりておほく數^{かず}ささぬ

心^{こころ}をとめて見^みよ小供^{こども}

色^{いろ}うるはしくあざやかに

庭^{には}に笑^{わら}へる牽牛花^{あさがお}の

日^ひ毎^{ごと}にかはる咲^{さき}どころ

低^{ひく}き處^{ところ}に咲^{さき}そめて

朝^{あさ}あけくに咲^{さき}かへり

古今和歌集
卷之八
百八十三
尊文官藏版

上うへに上うへにと咲さきあがる

様さまをバ見みよな目めをとめて

見みるあさがほの朝あさごと

所ところをかへて低ひくきより

高たかきに咲さけるその如ごとく

巳おのが修をさむる學がく問もんの

日ひ々に進すすみてゆくやらん

ひとりよくく顧かへりみバ

昨きの日のまゝにある事ことの

もしもなきに有あるか

萬よろづの物ものの靈かしらぞと

いはるゝ人ひとにありあがら

籬まがきによれる牽牛花あさがおの

花はなにも劣おとる事ことあらバ

いかに愧はづべき事ことやらん

やよ幼子おさないよ朝あさなく

とく起おきいでゝ勉つとめなん

ゆめあひとりそ牽牛花あさがおに

月かけ

河合耕一三河十四年

薄すすきいたれを招まねくらん

雁かりいたれをかよばふらん

妻つまとふ鹿しかのこゑたえて

千草ちぐさにすだく虫むしの音ねも

風かぜにそよげる萩あきの葉はも

物ものの哀あはれをそふるある

秋あきの夜よさむの池水いけみづに

廿日はつかの月つきのかけ見みえて

さびしき冬

三浦修吾筑後

花はなにあそべる少年わかうとの

年浪としなみよるのやすけれを

學まなびのみちをきはめん

さて成なりがたき事ことなるぞ

池いけのみぎはに飛とぶ蝶てふの

短みじかき夢ゆめのさめぬ間まに

幼年唱歌集 百八十五 博文館藏版

めでし櫻の木の葉みな
寂しき冬となるぞかし

吹く木枯にちらされて

冬の朝

奥本鐵漢廣鳴

あしたの風のいと寒く
ふりつむ雪のふかけれど
兄弟どもにおとなしく
さむけさえらぬ樂しさよ

背面のあべて白たへに
家の内に燃火をし
父のかたへに手を出し
語らふ事の樂しさよ

四季の歌

松崎四郎下總

彌生の空に野邊みれば

空ものどかにうち晴れて

雲かどまがへる山櫻
まして雲雀のいと高く

よに美しく見えにけり
雲井はるかに聲しつゝ

咲かされる卯花を
一聲たかくなるあり
名残にのこるあさ風に

月夜とみるか時鳥
轟きすぎし夕立の
池の蓮もにはひつゝ

一ひら薄はにいでゝ
晴れて雲なき大空に
されど何處も秋風の

鶉の宿も秋深し
照らす月影明らかし
物さびしげにわたりつゝ

時雨をさそふ木枯に
ふもとの川の錦なり
やがてふりくる白雪に

峯のもみぢ葉散り乱れ
み山おろしの吹きたえて
常磐の松も埋れつゝ

四季の遊

岡田賢治 伊豫

野山の花と鳥の聲
いざや遊ばん友とちと

さてもものどけき春の空
往くもかへるも打つれて

草木の若葉花あやめ
いざや遊ばん友とちと

さても涼しき夏の空
往くもかへるも打つれて

露の白玉月の影
いざや遊ばん友とちと

さてもさやけき秋の空
往くもかへるも打つれて

木々の花かと積む雪に
いざや遊ばん友とちと

さてもうれしき冬の空
往くもかへるも打つれて

名所四季

玉造梅子 武蔵

はるの彌生のあさぼらけ
一夜の雨にさくら花

忍が岡をとめくれバ
いろ香もふかく匂ふなり

ふくゆふ風にさそはれて

さをさしゆけバすみだ川

とびかふ螢のすいしさに

あつさの水にながれけり

とひくる人をまつ虫の

なく音ゆかしみ忍ばずの

池のほとりに来て見れば

月の影のみさやかにて

人目も見えぬこのあさけ

待乳の山をながむれば

玉とまがひて樹々の枝に

つもれる雪こそ真白なれ

三綱

佐藤 豊大坂

天

月日の光あきらけく

露のめぐみのあまねきも

誠を照らす天道の

こぼるゝ愛と知りぬべし

地

花に囀る鳥の音も

きよき泉の流るゝも

花も紅葉もすべて皆

自然の母の恵なり

人

五倫五常をまもりつゝ

天にも愧ず地にはぢず

自然の徳を積みあして

かぎりなき世を歩むべし

四君子

大角 鉞 神十五戸

見よく小供やよ子ども

みやまの谷に生ひ出て

清き香はなつかの蘭を

見よく子どもやよ子供
 色香えならずさく梅を
 見よく子どもやよ子供
 葉かへぬ色のかの竹を
 見よく子供やよ子供
 かをりゆかしさかの菊を
 聞けよく子供世の人に
 君子の名をばうくるなり
 人どうまれていそしまバ
 いかでか難き事あらん

名譽

みさを守りてたゆまずに
 曲らず折れずいと直く
 千草もまぼめる其時に
 たへられつゝ草木だに
 君子の名をばうけあんに

松田壯志郎 廣島十五年

學びのまどにおひたてる
 金もどくる夏の日も
 おこたる事なく勉つゝ
 おのが身のみの名譽か

わが幼子よいそしみて
 ともしび氷る冬の夜も
 高き名譽をあげよかし
 また父母のはまれなり

光陰

人と生れしうへからの
 古今無雙の人とあれ
 光陰の過ればふたゝびの
 をしめや惜め幼子よ

北川武雄 東京十三年
 學びの道をいそしみて
 かへらぬものぞ心して

つくせやつくせ

栗木榮 太名古屋

盡せやつくせ君のため

盡せやつくせ國の爲

日本男子の本分を

學べやまなべ君のため

學べやまなべ國の爲

劍もどがすべされざるぞ

父母の恩

小森政 治伊勢

富士の高嶺も猶ひくし

太平洋も猶淺し

いかにつくせを限なき

父母の恩わするなよ

御詞まもりて朝夕に

孝をつくせよ父母に

千尋の海

和田秀 二紀伊

千ひろのうみも木葉の滴

雲るる山も塵ひぢよりぞ

學の海いつとめいそしみ

進みてゆかバ岸にぞつかん

進めよ忍べ忍べよつとめ

勉學

靱山千太郎 相模

學びいそしむ事なくて

智恵ある人のなきぞかし

勉めて學べ幼児よ

月日をたゞにつひやすき

人どうまれて智恵なきい

人にかた手のなきよりも

鳥に翼の一つより
賤の少女

猶も不具なりかたわなり

名倉六治遠江

賤の少女よをとめ子よ
露かわきなばふし立たん
初めの草の十五日
怠る事なく田草とり
暑き日中を忍びつゝ
稲もさかえて葉もまげり

朝とく起きてさ苗とれ
苗腰をるな根をたつち
それより十日のたつ毎に
朝と夕の厭ふべし
艸とる業をつとめあは
年ある秋ぞやがてこん

過ぎゆく光陰

原豊 太信濃

銃をはなれし弾丸よりも
進みやすかる月と日を
學びのわざをいそしみて
たえず流るゝ水よりも
やよや幼子こゝろして
時計の針にさそひつゝ

早き日過る月日あり
さとりえりなば幼子よ
ゆめ怠たるな時の間も
流れて早き年月ぞ
まばしの間とてやすまざる
學びの業をつとむべし

日本丸

服部吾一美濃

日本丸に乗り組める
われ等が船の其名さへ
先に進めるもる船も

四千余萬のはらからよ
太平洋に浮びつゝ
いつしか越えて今のはや

花も實もあはる文明の
今まばらくぞ諸共に
豊榮昇る旭かげ

正しき道

天照す日二つあし
世にふたつなき駿河なる
白き人の心なり
黒きにそむき稚子たちよ
やよ稚子たちよく
草をわけても拾ふらん

港に早も着かんどす
勉め勵みて怠たらず
輝く御旗をひるがへせ

佐伯嘉助 伊豫

正しき道も二つなし
富士のたかねにふる雪の
心の色の白さを
味甘き椎の實の
薫ゆかしき白菊の

露にぬれても手折るらん
正しき道にきそへかし
やよ稚子たちよく
草葉のうへの朝の露
千里のつゝみも蟻の穴
二つあし日とあらそへよ
やよ稚子たちよく
たい一足におこるあり
忍びたへつゝ朝夕に
學びのわざをいそしみて

西南の役

つとめはげみて怠らず

榮華の空に浮ぶ雲
必たのみにおもふなよ
ちひさき事に心おき

はるけき道も足もとの
塵もつもりて山をなす
正しき道をたどりゆけ

淺學生

ひとたび君にまごゝろを
けふりと消し益荒雄の
明治の御代も十あまり

盡しゝかひも去る山の
過しむかしを尋ねれば
五とせまへの頃とかよ

あがむる野べも山の端も
かばねの道に埋もれて
空にとびかふもろ鳥も

踏分がたくますらをの
峯にかちしむ鹿のこゑ
おのがねぐらに迷ひつゝ

妹背のちぎり深かりし
夫のはかなくわだし野の

ゆふべの夢の覺ぬ間に
あしたの と消うせて

かたみに残る孤兒の

父を慕ひてなげくこゑ

聞くだにうしな世の様
人の命もいたづらに
文みる度にそのかみを

またゝくひまに數多き
すてゝ哀を留めけん
思ひやるこそ悲しけれ

まア坊に

竹柏園主人

中の弟をともなひて
肩をたゝきて手を引て
『この御社の立派さよ

そゝろあるきの二人づれ
話すはあしのあせけあさ
こゝに祭つた神様の

『そなたの知らずか教へてん
神といへど人間よ
そなたも學問骨をりて
『ならうよく精だして
昨夜きかしてもらうたる
『それのどちらもえらいのさ』
『そんなら兄さん辨慶と』
『辨慶よりかもえらいのさ』
『さつても強い』と驚きて
兄の弟をいたはりて
泣くものでない家康の

東照宮といふ神よ
家康といふえらい人
家康はどになりなさい』
けれど兄さん家康の
大閣様よりえらいのか
思はず木の根につまづけば
あちらへいつて休うよ』

杉の下道すぎゆきて
兄のわが家をいづるとき
密柑三つをとり出て
弟の一つたべをへて
兄の見つけて『なせたべぬ』
『あまりにこれが甘ければ

勉強ぶと

北極星をさゝふるまでに
わが身に智恵のなき時
それくそれく
金剛石ももとのといへば

ならぶ櫻の下かげに
母のなさけにもらひこし
弟に二つわれ一つ
一を袂にいれたれば
弟の袂をふりあがら
一つのこしてまア坊に』

勉強せい 勉強せい

黄金のよしやありとても
人どうまれし甲斐どなき
みがきて光のいでたるぞ

智恵ちゑのありとも學まなばずバ

いかでか光ひかりのいづべきぞ

それくそれく

勉強べんきやうせい勉強べんきやうせい

人ひとと生うまれて學問がくもんなき人

鳥とりに翼つばさのなきよりも

車くるまに轍わだちのあきよりも

まさりて不具かたわな物ものぞかし

それくそれく

勉強べんきやうせい勉強べんきやうせい

幼わかなき時ときの一生いっしやう涯がいに

二度ふたたび來きたるものならず

大おほきくなりて悔くやむとも

其そのかひ更さらにあきものぞ

それくそれく

勉強べんきやうせい勉強べんきやうせい

幼わかあき時ときに學問がくもんせずバ

一いっ生しやう人ひとに笑わらはれて

一いっ生しやう人ひとの下したにゐて

世よに耻はづかしき事ことぞかし

それくそれく

勉強べんきやうせい勉強べんきやうせい

學まなびの道みちをたどへていはい

大おほ路ちを行ゆくに異ことならず

たゆまず飽あかずゆく時ときの

いたらぬ事ことのあるべきぞ

それくそれく

勉強べんきやうせい勉強べんきやうせい

思おもへや思おもへ朝夕あさゆふおもへ

人じん生せいわづかに五ご十じゆ年ねん

苦くの下したにも埋うづもれず

朽くちせぬ其その名なを留とどむべし

それくそれく

勉強べんきやうせい勉強べんきやうせい

幼年修身數へ歌

高倉爲二和泉

一つとや

人ひとの目め的てき第一だいいちよ

幼よちより定さだめよ順整しゆんせいに

二つとや

奮るつて爲せよ物事を

百折不撓の心もて

三つとや

磨けバ光る智慧なるぞ

磨けやみがげ撓みなく

四つとや

讀みかき學問怠たるな

學ぶの出世の基なり

五つとや

いかに才能ありとて

人にはほこらず遜れ

六つとや

無疵の國なる日の本の

御積威を世界に輝かせ

七つとや

何より大事の人々の

忠君報國孝悌よ

八つとや

矢のいる如きの光陰ぞ

寸時も無益に費すな

九つとや

こゝろの勇壯活潑に

言語のすべて慎めよ

十つとや

時に腹たつ事あるも

こらへ忍べよ後の爲

教訓かぞへ歌

一つとや

人を怨むな羨やむな

怨めば人にも怨れん憎れん

長濱克義 沖繩十六年

二つとや

ふたたび得られぬ父母を

鳥や鳩さへ孝をする人の尚

三つとや

み國のために命をも

捨る覺悟で身を盡せ事を爲

四つとや

よき子を欲しと思ひなば

愛に溺す教へよや勵ませよ

五つとや

石と金との堅ければ

人の智力で粉にぞする思儘

六つとや

無理に頼むを神はとけ

誠の心に願ひを叶べし

七つとや

二つとや

難儀も苦勞もたゞ暫し

勉めて事成る其愉快限あり

八つとや

矢丸も劔も何のその

日本男子の恐べき死るとも

九つとや

こゝろに悟れる事あらば

とくく過わらためよ速に

十つとや

時のまばしも寶なり

無益に送な今日の日を片時も

一つとや

學生かぞへ歌

村上正隆

二つとや

人に遠き考への

あければ近き憂あり

古ふるきを温たづねて新あたらしき

事ことを知るのが學問がくもんぞ

三つとや

身みをたて道みちを行おこなひて

親おやの名顯なあらはせ子こたる者もの

四つとや

讀よむ事こと百もも度たびくりかへせ

其理そのり自然じぜんにあらはれん

五つとや

戒いましむべきの色いろと酒さけ

人ひとをバそこあふ大敵たいてきぞ

六つとや

無む益えきに時ときを費つひやすな

一ひと度たび去さりての歸かへらぬぞ

七つとや

汝なんぢの好このまぬ所ところをバ

決けつして人ひとに施ほこすを

八つとや

山やまを作つりて九この俣ひら

功からの一いつ簣きにかくぞかし

九つとや

今こん日にち學まなばす明日みあしたの

ありとて怠おこたる事こと勿なかれ

十つとや

徳とくの孤こからず隣となりあり

勉つとめて養やしなへ徳性とくせいを

子守歌

松浦龜吉備後

私わたしの大だい愛あいの坊ぼう様さまの
常つねの振ふる舞まひ活くわつ潑ばつに
あなただの生せい長ちやう遊あそばして

今ことし年し三みつつにおはします
御機嫌ごきげんよきこそ嬉うれしけれ
本ほんや草紙ささを携たづへて

小學校に御越します
 親愛深き兄様や
 風の吹く日も雪の日も
 學びの道はほどほく
 心をこめて勵みなば
 涯知られぬ大海も
 教へみちびく師の君の
 心の底によくとめて
 月日の早く矢の如し
 玉と育つる坊様よ
 古今にためしあるまじき

學びの節にありたらば
 善き友達と手をひきて
 喜びすゝみて通ひませ
 奥また奥と連なれど
 深き奥にもいたるべし
 撓まず漕がば渡るべし
 世にわりがたき御詞を
 かならず忘れ給ふあよ
 やがてその時いたりかん
 御身健康に人とあり
 博學多才の人となり

功名手柄をかゝやかし
 これがあまたの孝行ぞ
 すぐれし人にありませよ

父母の御名をも揚げませよ
 玉と愛ある坊様よ
 私の大事の坊様よ

殖産興業伊呂波唱歌

川村暹尊丹後

維新以來世の開け
 花にかゝやく東洋の
 穂あみ豊によくみのり
 収穫る木竹土や石
 利用あまたの織物や
 流通交益たえまなく

陋風たえて美しくしく
 日本の國のおだやかに
 平地のおろか海山に
 千尋の底の藻鹽草
 塗物陶器製茶など
 多く他國へ輸出す

我等が民の幸福の
 余國の人にたち向ひ
 禮義忠孝よく守り
 月日にすゝむ人の智慧
 習ひ勵みて功をたて
 報ひ今ぞ身にうくる
 衣食ゆたかに富むにあり
 己を富まし國を利し
 日本の形をうしなはず
 競争しても賣買に
 心づくしも國の爲

限なき世の國の徳
 稱へはこるも勇ましく
 其身の務おこたらず
 練りだす工夫新らしく
 樂に此世を送るべし
 親族妻子の樂しみも
 農家の時に耕して
 工夫を凝す工匠の
 優る美術を弘むべし
 不利をはからぬ商人の
 得意にまかせて勉強し

天然物をよく育て
 盛に出せ國々へ
 優美にすゝむ開明の
 身の爲さてゝ家のため
 遠世不朽の名を残し
 百世を照す大君の
 末の榮をはかるべし

ありとあらゆる製作し
 究理發明自由の世
 明治の御代のたまものぞ
 始終の君のためなれば
 東にひかる大八洲
 千秋樂をとあへつゝ

繪入幼年唱歌大尾

明治廿六年三月二日印刷出版

正價金拾錢

編輯兼
發行者

大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

版權
所有

印刷者

宮

本

敦

神田區小川町一番地

東京日本橋區本町三丁目

發兌書林 博文館

山田
美妙齋
君著

新調
韻文

青年唱歌集

全二冊雅裝美
本仕立省亭米
僊二氏密書入
正價一冊拾錢
郵稅一冊二錢

第一編目次

皇祭○春秋二季皇靈祭○天長節○四方拜○孝明天皇祭○紀元節○神武天
 故郷○山八州○口號○未見の友磊落子へ○秋月述懷○願はくば○とて
 ○明治廿四年元旦○女郎花○落葉の吟○病後の吟○花のかをり○霖雨○
 ても此世○庭前の慈愛○落魄の旅○岩本善治氏學兒の賀○夢○露皇太
 其儘の花○母の慈愛○組屑買○夏の貧家○静けき山里
 子を送り奉るとして○花の雲○春の曙○春の遠山○若葉の月○初夏○桂川
 第二編目次 ●(四) ●(五) ●(六)
 鶉飼の圖○暁秋即事○老梟叫月の圖○夜の霧○冬の山路○沖●(五)少
 女裁縫の歌○こどもも○ともしら○つゝ日章旗○老女杜鵑を聞く○沙干狩
 雲一片○迷の淵○つばすみれ●雜○つゝ日章旗○老女杜鵑を聞く○沙干狩
 ○はたるがりの鐘○桃花○いとまごひ○残夢○寒宵即事○歌ながからす○阿
 籠○初夏の香を焚く○花散るさとの弱法師○鐘の音
 雨窓前に香を焚く○花散るさとの弱法師○鐘の音
 古屋姫○尾花の君○花散るさとの弱法師○鐘の音
 其熱血多情の筆揮れたり歴史情事夏秋冬祭日等皆な載せて光彩を發せり

其熱血多情の筆揮れたり歴史情事夏秋冬祭日等皆な載せて光彩を發せり

大和田 君建樹 著

尋常 帝國唱歌

全二冊和裝大判 密書挿入美本 正價一冊七錢 郵稅二錢

目次

(上卷) ● 始業の歌 ● 好き家 ● 鯉よ龜よ ● 朝の歌 ● 田植の歌 ● 國
 民 ● 親の恩 ● 神風 ● 小蝶 ● はせつり ● 貧しき人 ● 今こそ ● 旅の
 空 ● ドドド ● 始業の歌 (下卷) ● 八咫鳥 ● 日本武尊 ● 富士の高嶺 ● 元
 旦の歌 ● 時計 ● 皇祖の祭 ● 宮の山 ● 謠へよ波 ● 高津の宮 ● 運動會 ● 今日
 から休 ● 源平 ● 夕霜 ● 湊川 ● にひなめ

大和田 君建樹 著

高等 帝國唱歌

全二冊和裝大判 密書挿入美本 正價一冊拾二錢 郵稅一冊二錢

目次

(上卷) ● 春の歌 ● 如意輪堂 ● 月と我と ● ゆげの水 ● はたるはた
 る ● 時は翼 ● 夕の雲 ● 閑龍 ● いもとの名 ● 水蒸氣 ● 秋は來たり
 ● 農家の希望 ● すみれ ● 菅公 ● 樂しき時 ● 母の心 ● 夜あけ ● 採集の歌 ● ●
 鍛冶の歌 ● 池の蛙 ● ちび ● 夕暮 ● 君恩 ● 竹馬 (下卷) ● 三種の神器 ● 夢 ● ●
 和氣清磨 ● 自然の音楽 ● 忍耐 ● 嵐山 ● 雛の雀 ● 二月十一日 ● 子供の愛 ● ●
 千鳥の聲 ● 蟻の子 ● 車はくる ● 夕たつ雨 ● 亡友 ● すいみの歌 ● 學校
 の道 ● 祝日 ● 水の歌 ● おどづれ ● 老木の蔭 ● 伊勢の宮居 ● 笛の音 ● 水の
 草 ● 工女の歌 ● 石橋山

學習院御用掛陸軍大佐高島信茂公題辭 東京音樂學校教授從七位上眞行先生校閱

日本軍歌

學習院音樂教官 納新辨次郎君編纂

全一冊和裝大判 曲譜挿入美本 正價金拾二錢 郵稅二錢

目次

● 海ゆかば ● 千代田振 ● ふみこめ人々 ● たまちるつるぎ ● ひまゆ
 く ● 駒 ● すいめく ● 凱旋 ● 大和島根 ● をぼろのさざり ● さるべし
 ● おやの恩 ● ますらたけ ● 宮城 ● いさすいめ ● 御國の旗 ● 春の
 露 ● 進撃歌 ● みづくかばね ● 學びの道 ● こしかたな ● 功戰

森鷗外。森田思軒。徳富蘇峯三君序文 幸田露伴君跋 中西梅花道人君著

新體梅花詩集

全一冊洋裝美本 正價二拾錢 郵稅四錢

目次 ● 九十九の姫 ● 橋々露 ● 前御前 ● 毒漉禪師を辞し虎溪山を出ると
 ● 松壽軒西鶴の畫像に賛する ● 墨川白鷗の詞四首 ● 對空吟 ● 戯れ
 ● 露伴子と韻を探りし折柄己アエの雨列を得しかば二首 ● 江戸紫に題す
 ● 露の舎主人 ● 竹の舎主人三首 ● 鷗外漁史 ● 古蒼樓主人 ● 靈魂 ● 出放題す
 ● 鳥 ● 須磨の月夜 ● 李青蓮か菩薩蠻の意を譯す ● おなむく柳永か卜算子
 ● 信 ● 原作者の名を失す二首 ● 米偲子の西京に行れしと聞き想鴨河納涼
 ● 走 ● 浦のくまや

幼幼年等全年書

正價一冊二百頁拾錢●六冊前金五拾七錢●十二冊前金壹圓八錢●全廿冊前金一圓七十錢●
 郵稅一冊二錢●每月一回又は二回發兌

本書は修學に開き幼年諸君が家庭補習の好友となり又小學生徒諸君が坐右參考の錦囊たりんと
 期し普通小學科目を網羅し左の如く毎月一卷又は二巻づつ發行し全書拾巻を以て完成
 せんとす其材料は當代專攻の名家に囑託して大に之を精選し智徳兼れ進むの目的を寓す文章
 け簡易明暢加ふるに總傍訓を附して容易に了解せしめ毎巻東都に著名なる畫伯の揮毫を乞ひ鮮明
 美麗なる繪畫數十個を挿入す故に一度本書を披けば先づ美觀を見るの快樂を得て更に學問の理解
 力を助くる繪畫又讀書君が携帶の便と保存の技術と計り製本は中形の和裝を以て一部に繪畫の貼るべ
 めて堅く主とせり爾るべし代價は本書全部を通覽するの學力を養ひ得べし幼年諸君一閱の上陸續
 く一部の餘餘教科書たるべし若し本書全部を通覽するの學力を養ひ得べし幼年諸君一閱の上陸續
 むす居るがらにして愉快の間に小學全科目を卒業するの學力を養ひ得べし幼年諸君一閱の上陸續
 愛讀あらむとを請ふ

目科總書本

- | | | | | | |
|-----|----|------|-----|----|------|
| 第一編 | 繪入 | 日本歷史 | 第一編 | 繪入 | 遊藝算術 |
| 第二編 | 繪入 | 幼年歷史 | 第二編 | 繪入 | 萬國地理 |
| 第三編 | 繪入 | 幼年身體 | 第三編 | 繪入 | 萬國地運 |
| 第四編 | 繪入 | 幼年遊藝 | 第四編 | 繪入 | 商業讀本 |
| 第五編 | 繪入 | 幼年讀本 | 第五編 | 繪入 | 農業讀本 |
| 第六編 | 繪入 | 理科讀本 | 第六編 | 繪入 | 水産讀本 |
| 第七編 | 繪入 | 文科讀本 | 第七編 | 繪入 | 立藝大鑑 |
| 第八編 | 繪入 | 作文讀本 | 第八編 | 繪入 | 工藝習案 |
| 第九編 | 繪入 | 國文讀本 | 第九編 | 繪入 | 幾何書法 |

全書部 廿冊 紙上等 印刷 裝入